

山形県埋蔵文化財調査報告書44集

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

# 東興野 B 遺跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

1 9 8 1

山形県教育委員会

ひがし こう や  
**東興野B遺跡**

—発掘調査報告書—

昭和 56 年 3 月

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した一般国道47号線狩川バイパス建設による土砂採集事業にかかる「東興野B遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

4月中旬から6月下旬におよび二ヶ月余の発掘調査により、縄文時代前期から中期の住居跡をはじめ、当時の生活用具である土器や石器などが多数発見され、とくに、今から5000年前、すでに最上川が人々の営みの中心であったことが明らかになり、当地域の空白のページを埋める貴重な資料を得ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺跡である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に、心から感謝申し上げるものであります。

昭和56年3月

山形県教育委員会  
教育長 大竹正治

# 例 言

1 本報告書は、一般国道47号線・狩川バイパス土砂採集事業に係るため、山形県教育委員会が調査主体となり、昭和55年4月14日（月）から6月26日（木）まで47日間に亘って発掘調査を実施したものである。

2 調査にあたっては、立川町教育委員会並に建設省東北地方建設局酒田工事事務所などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）

現場主任 渋谷 孝雄（山形県教育庁文化課技師）

調査員 佐藤 正俊（山形県教育庁文化課技師）

中嶋 寛（山形県教育庁文化課主事）

事務局 事務局長 浜田 清明（山形県教育庁文化課課長）

事務局長補佐 荻野 和夫（山形県教育庁文化課課長補佐）

事務局員 設楽周一郎（山形県教育庁文化課主事）

田内 糸子（山形県教育庁文化課主事）

4 挿図縮尺は、遺構では1/40を基本とし、土器実測図は1/4とし、それぞれにスケールを示した。遺物図版については、土器片1/2.5・完形一括土器1/4～1/8で、石鏃1/1.5・打製石器1/2・磨製石器1/2・1/3とした。本文・挿図中の記号は、ST—住居跡・EP—柱穴・SK—土壇・EU—埋設土器・SX—不明遺構と呼称し、住居跡・柱穴・炉跡・土壇・埋設土器・不明遺構は全体に一連番号を付した。

5 本報告書の作成は、渋谷孝雄・佐藤正俊が担当・執筆した。本書の編集は渋谷孝雄・名和達明があり、全体については佐々木洋治が総括した。挿図・図版の作成にあたっては、太田八重子・津留房子・黒金佳子・高橋貴恵子・佐藤隆子・鏡 克子・吉田史子・奥山厚子・松沢美保子がこれを補助した。

# 目 次

I 調査の経緯			
1 調査に至る経過	1	3	
2 調査の経過	1	4	
II 遺跡の概観		IV 遺 物	
1 立 地	5	1 土 器	36
2 層 序	6	2 石 器	58
3 遺構と遺物の分布	6	V まとめ	
6		1 遺構について	84
III 遺 構		2 土器について	85
1 住居跡	9	3 石器について	86
2 土 城	19		

# 挿図目次

第1図 遺跡全体図	2	第13図 中央部ピット群	34
第2図 遺跡位置図	5	第14図 EU111	35
第3図 遺構分布図	7	第15図 完形・一括土器	55
第4図 ST8・9平面図・横断図	10	第16図 石鏃II b類外形	59
第5図 ST36・SK55平面図	12	第17図 石鏃模式図	59
第6図 ST10他平面図	17	第18図 石鏃模式図	60
第7図 SK1他平面図	20	第19図 石匙模式図	62
第8図 SK12他平面図	21	第20図 打製石斧及びその類品模式図	65
第9図 SK33平面・断面図	24	第21図 スクレーパー模式図	71
第10図 SK37他平面図	27	第22図 磨石模式図	74
第11図 中央部土城群平面図	29	第23図 石鏃模式図	81
第12図 28-27区ピット群平面図	33		

# 図版目次

図版1	遺跡遠景……………3	図版30	S K33 R P出土状況……………23
図版2	遺跡近景(南より)……………3	図版31	S K33 R P19他出土状況……………23
図版3	遺跡近景(西より)……………3	図版32	S K33南北セクション……………23
図版4	調査風景(トレンチ掘り) 3	図版33	S K33東西セクション……………24
図版5	剥片出土状況……………4	図版34	S K33土器出土状況(1)……………25
図版6	トレンチ掘り終了……………4	図版35	S K33土器出土状況(2)……………25
図版7	調査風景(精査)……………4	図版36	S K37セクション……………26
図版8	調査風景(実測)……………4	図版37	S K38セクション……………26
図版9	S T 8 出土石錘……………9	図版38	S K37完掘状況……………27
図版10	S T 8 出土凹石……………9	図版39	S K38完掘状況……………28
図版11	S T 8・9完掘状況(南から) 11	図版40	S K39完掘状況……………28
図版12	S T 8・9完掘状況(東から) 11	図版41	S K40完掘状況……………28
図版13	S T36・S K55セクション……………13	図版42	S K101完掘状況……………28
図版14	S T36・S K33完掘状況……………13	図版43	中央部遺構群全体……………30
図版15	S T10出土石器……………14	図版44	中央部遺構群北半……………31
図版16	S K72・R P35……………15	図版45	中央部遺構群南半……………31
図版17	S K71・R P36……………15	図版46	S K78セクション……………32
図版18	S K71・72セクション……………15	図版47	S K78完掘状況……………32
図版19	S K72セクション……………15	図版48	S K78完掘状況……………32
図版20	S T10他完掘状況(南から) ……16	図版49	S K80他完掘状況……………32
図版21	S T70他完掘状況(南から) ……16	図版50	S K83完掘状況……………32
図版22	S K1セクション……………19	図版51	S K97完掘状況……………32
図版23	S K2セクション……………19	図版52	E U111出土トチ・クルミ ……35
図版24	S K3・4セクション……………19	図版53	E U111側面……………35
図版25	S K12完掘状況……………22	図版54	E U111セクション……………35
図版26	S K13セクション……………22	図版55	S T 8・9覆土中……………37
図版27	S K41セクション……………22	図版56	S T10覆土中……………38
図版28	S K12~15・41ピット群……………22	図版57	S T36・70覆土中……………39
図版29	S K33・R P17出土状況……………23	図版58	S K14・71覆土中……………40

図版59	S X35出土他	41	図版73	石鏃・尖頭器・石錐	61
図版60	S K87他覆土中	42	図版74	石匙(1)	63
図版61	包含層出土第1群	43	図版75	石匙(2)	64
図版62	包含層出土第1群	44	図版76	打製石斧及びその類品(1)	67
図版63	包含層出土第1群	45	図版77	打製石斧及びその類品(2)	68
図版64	包含層出土第1群	46	図版78	打製石斧及びその類品(3)	69
図版65	包含層出土第1群	47	図版79	打製石斧及びその類品(4)	70
図版66	包含層出土第1群	48	図版80	スクレーパー	72
図版67	包含層出土第2群	49	図版81	磨製石斧	73
図版68	包含層出土第3群	50	図版82	磨石(1)	75
図版69	包含層出土第3群	51	図版83	磨石(2)	76
図版70	包含層出土第4群	53	図版84	凹石	78
図版71	完形・一括土器・土偶	57	図版85	敲石・線刻礫他	80
図版72	ナイフ形石器・石刃	58	図版86	石錘	83

## 付表目次

表一1	ナイフ形石器他観察計測表	58	表一8	磨石観察計測表	75
表一2	石鏃・尖頭器観察計測表	59	表一9	凹石観察計測表	77
表一3	石錐観察計測表	60	表一10	敲石観察計測表	79
表一4	石匙観察計測表	63	表一11	線刻礫観察計測表	79
表一5	打製石斧観察計測表	66	表一12	有溝砥石観察計測表	79
表一6	スクレーパー観察計測表	71	表一13	石皿観察計測表	79
表一7	磨製石斧観察計測表	73	表一14	石錘観察計測表	81

## グラフ目次

グラフ一1	打製石斧長幅相関グラフ	65	グラフ一3	石錘厚・重量相関グラフ	82
グラフ一2	石錘長幅相関グラフ	82			

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

山形県の内陸地方と庄内地方を結ぶ幹線である国道47号線は、年々交通量が増加し、幅員の狭い立川町狩川地内で、しばしば渋滞し、また、歩行者等に交通災害の危険性も生じてきたことにより、狩川バイパスが建設されることになった。路線は立川町狩川東興野から西興野に至る約3.5kmで、水田地帯を通ることから、全線にわたって盛土工法がとられることになり、建設工事に必要な土砂は、工事の主体者である建設省東北地方建設局酒田工事事務所と地元立川町との協議により、同町狩川大堰台から採取されることになった。

ところが、この土砂採取地の一部は東興野B遺跡として登録されていることから、山形県教育委員会で、昭和54年10月に試掘を含む分布調査を実施したところ、土砂採取地約20,000㎡のうち、西南部の平地地約6,000㎡に遺物・遺構が存在することが明らかになった。

この調査結果をもとに、山形県教育委員会と建設省東北地方建設局酒田工事事務所との間で数回の協議を行った結果、事前に緊急調査を行うことで合意し、昭和55年4月10日発掘調査委託契約書を締結し、同4月14日から調査を実施することにした。

## 2 調査の経過

発掘調査は昭和55年4月14日から6月26日まで延47日間実施した。調査対象地区は遺跡の北東部にあたる土砂採取予定地で、南北100m、東西60m、約6,000㎡の面積をもつ。調査対象区内にグリッド基線をN-7-Wのほぼ南北方向にとり、対象区全体に3×3mのグリッドを組んで調査を進め、最終的に3,780㎡について精査・実測を行った。調査の経過は以下の通りである。

### 4月14～18日

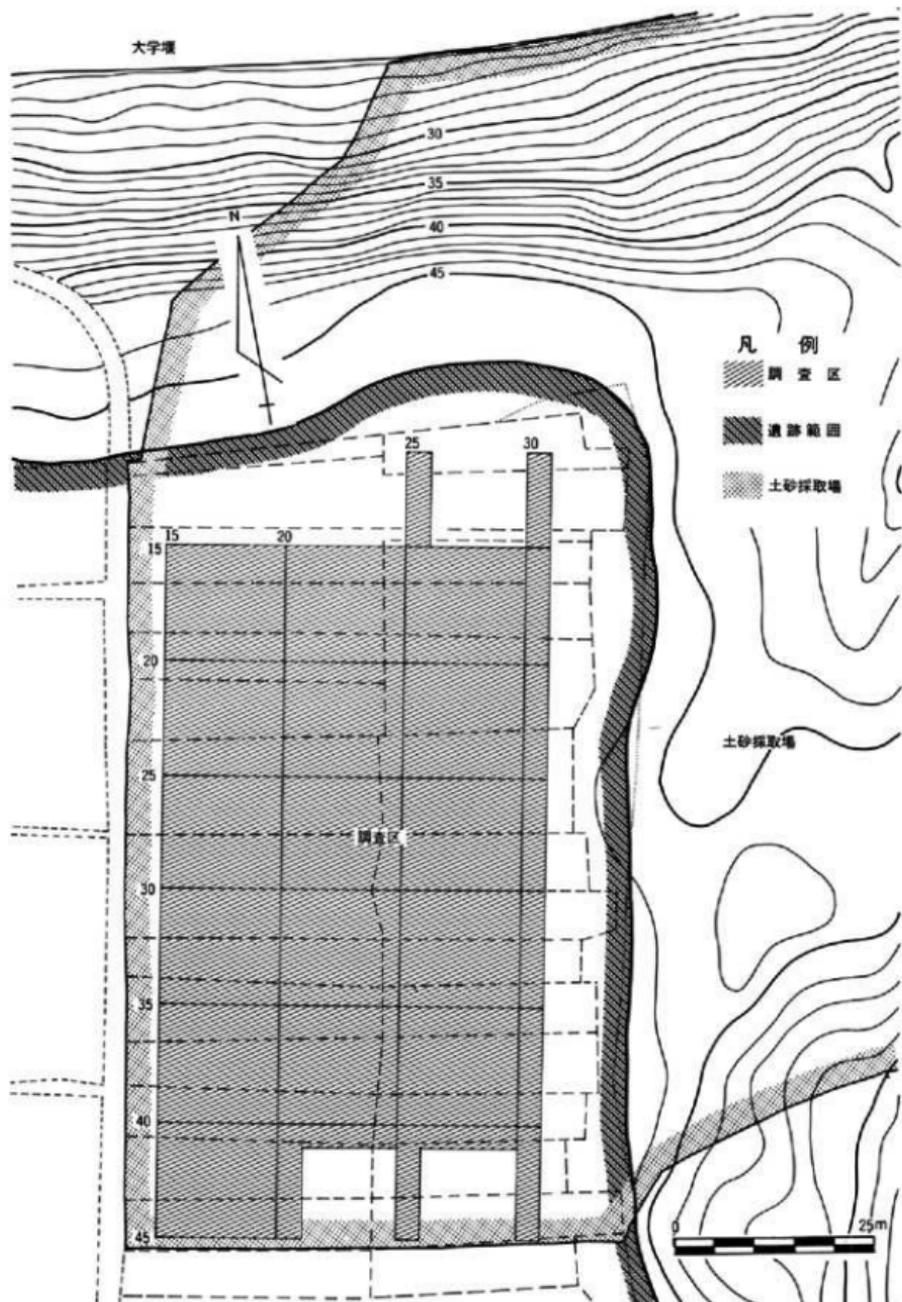
14日に器材の搬入、調査事務所の設営を行い、雨の中神事による鎌入式を行う。15日から本格的な調査に入り、グリッド設定の後、4グリッド分3×12mを一単位のトレンチとしX軸(南北)に沿って計24本の粗掘りを行う(図版4)。遺物は土器にくらべ石器が多く、数ヶ所で土色変化を確認するが、遺構の検出はわずかしい模様である。

### 4月22～25日

Y軸(東西)に沿って計18本の粗掘りを行い、トレンチ掘りを終了する(図版6)。この段階で遺物・遺構の密集する1500㎡の精査区を設定する予定であったが、遺物・遺構は散漫に分布することから、南北90m、東西48mの範囲について拡張することとした。

### 5月6～9日

大字塚



第1図 遺跡全体図

調査区西部（X軸15～19）は手掘りで拡張、Y軸15～29の範囲が終了。Y軸20以東は押しプルを使用して拡張する。遺構は確認できず。現在まで18箱の遺物が出土する。

5月12～16日

手掘りによる拡張区の南半、Y軸30～44区が終了し、押しプルによる拡張区を合わせ3,780㎡の表土除去が終了。拡張区の北西隅からジョレンによる遺構検出作業を開始し、北半がほぼ終了し、土壌3基、ピット7基等を確認する。また、これらの遺構の周辺で遺物が多く出土する傾向がみられる。

5月19～23日

拡張区南半の面精査を行い、1回目の遺構検出作業を終了する。この段階で17～24区付近を中心として遺構のない空白地帯があり、これを囲むように遺構が分布することが判明する。住居跡3棟以上、土壌10基以上を確認するが、南半での遺構検出はほとんどない。

5月26～30日

先週まで検出した遺構のうち、住居跡3、土壌8基の精査を行う。ST8・9は床面を検出。ST10は精査中に東半において複数の遺構と重複することが確認され一時中断。土壌は、SK1、2、3・4、7、13、14・15を精査するが、遺物を多く含むものはない。

6月2～6日

ST8・9の床面を精査し、ピットの検出・精査を行い、写真撮影、平面実測まで終了。SK33の精査を行い、一括土器3個



図版 1

遺跡遠景



図版 2

遺跡近景（南より）



図版 3

遺跡近景（西より）



図版 4

調査風景（トレンチ掘り）

体以上を検出。S X 34・35の精査。34は深さが3～5cmと浅く、遺物の出土もない。35は整理箱で3箱の遺物が出土し、当初は数棟の住居の切合いとみられたが、底面は中央部で深くなる傾斜をもち、ピットもなく、自然地形の落ち込みの可能性が高い。

6月9～13日

9～11日に再び面精査による遺構検出を行い、住居跡1（ST36）、土壌5基（SK37他）、ピット群を検出する。先週まで検出した遺構と新たに検出した遺構を精査。また、X軸17列17～21、19列18～22の西側、そしてY軸21列15～20の北側に幅0.5mの試掘溝を入れ一段下げるが遺構の発見はない。また、遺物洗浄中にナイフ形石器、石刃が見つかり、出土区の20～21-16～17区の地山を掘り下げるも、旧石器の出土なし。

6月16～20日

ST10付近の面精査を行い、住居跡2、土壌2、住居跡の可能性のある遺構2が切合っていることが判明。これを精査する。また19～21-25～27の一面に幾分黒ずんだ土色変化が認められ、この部分に試掘溝を入れ5～10cm下げたところ、土壌・ピットが多数確認され、これを精査する。18日に現地説明会を行い約70名の参加があった。

6月22～26日

中央部の土壌・ピット、EU111の精査（図版7）。22～23日に簡易遣り方を設定して、南側より平面実測に入る（図版8）。また、これと併行して各遺構の写真撮影を行う。26日に平面実測レベリングを完了し現場を撤収する。



図版 5

剝片出土状況



図版 6

トレンチ掘り終了



図版 7

調査風景（精査）



図版 8

調査風景（実測）

## II 遺跡の概観

### 1 立地と環境 (第2図)

山形県内陸地方を南北に貫流する最上川は、新庄市本合海で西に向きを変え最上峡に入っており、立川町清川で、月山を源とする立谷沢川と合流して庄内平野に入る。東興野B遺跡は東を立谷沢川、西を庄内平野、北を最上川で区切られる月山から延びる出羽丘陵の北端に位置する。この丘陵は、最上川や庄内平野に接するところで、入り組んだ台地状の突端をもち、この台地上には、縄文時代から南北朝時代までの多くの遺跡が確認されている(第2図)。丘陵に接する平地には縄文時代晩期・平安時代の遺跡が分布し、その一部である古楯・阿古屋・西浦遺跡は昭和48年の圍場整備に伴い、発掘調査が行なわれている(佐藤他1976)。また、清川から立谷沢川を6km遡った左岸の段丘上に、早坂台遺跡があり、昭和55年7～9月に土砂採取に伴う緊急発掘調査が行なわれ、縄文時代前期後半の好資料が得られている(立川町教育委員会1980年)。

東興野B遺跡は、東と西を小谷で区切られる東西約130m、南北約500mの舌状の台地へのり、台地の奥で、東興野A遺跡ののり舌状台地と接している。この台地は南から北へゆ



第2図 遺跡位置図

るやかに傾斜し、台地中央部で標高50mを計り、調査区では南部で49m、北部で46mとなっている。最上川河床からは約30mの比高をもつ。現在は野菜や、牧草などの畑地として利用されており、遺物は台地全域に散布するが、調査区を含む北部で特に密度が高い。

## 2 層 序

調査区の南西隅から北東隅に向ってゆるやかに傾斜し、約3mの比高差をもつ。また西側から東側に傾斜し約1mの比高差をもつ。基本層序は以下の様になっている。

- I層 暗褐色シルト 耕作土で攪乱が著しい。10～20cmの層厚をもつ。
- II層 褐色シルト 遺物を含む層で、III層への漸移層。約10cm。
- III層 黄褐色粘土質シルト 5mm大の小礫を含む。遺構はこの上面で検出される。

## 3 遺構と遺物の分布 (第3図)

本遺跡からは住居跡、土壌、ピット、埋設土器などの遺構が検出され、土器・石器などの遺物が整理箱で131箱出土した。出土した遺物から、本遺跡は縄文時代前期末から中期中葉にかけては集落として、また旧石器時代後期と、弥生時代後期にも、一時的に利用されたことがわかった。ここでは検出された遺構と遺物の分布を時代別に概観してみる。

旧石器時代 16-25区、21-16区でそれぞれナイフ形石器と石刃が1点ずつ出土。

縄文時代前 期大木6式 ST8・9、ST36などの住居が営なまれ、SK33、SK55、SK80などの土壌が構築された。この時代の遺物は15-19-15-19区、15-19-25-29、15-19-30-34区などの調査区西部の遺跡中央部で多く出土する傾向がみられ、台地の縁辺に近い東側での遺物の出土はほとんどない。

縄文時代中 期大木7a式 SK40、SK74、SK84などの土壌がつくられた。遺物は20-24-20-24区で最も多く出土し、その他にも散漫に分布する。

大木7b式 確実にこの時期に属する遺構はない。遺物は散漫に分布するが出土量が多い。

大木8a式 ST10・70、などの住居が営まれSX117・118、SK71・72、SK1、SK2、SK12、SK13、SK14、SK37、SK38、SK83、SK97などの遺構がつくられた。遺物も調査区全域で出土するが、特に台地縁辺に近い調査区東部と北部において出土量が多い。SX35の捨て場が形成されたのもこの時期である。

大木8b式 SK41がつくられ、土偶が残された。遺物の出土量はきわめて少ない。

弥生時代後 期天王山式 EU111、SK73がつくられたが、その他の痕跡は全くない。



### III 遺 構

#### 1 住居跡

##### 1) ST 8・9 (第4図 図版9~12)

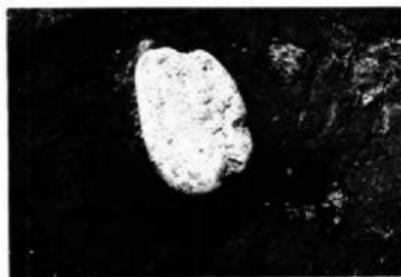
調査区の中央西部の16~19-28~30区に位置し、III層上面で確認された。ST 8がST 9を切っている。

ST 8 平面プランは不整の隅丸方形で、東へ張り出しをもつ。長軸520cm、短軸390cmをはかり、主軸方向はN-70°-W、床面積は15.0m<sup>2</sup>である。確認面からの深さは6cmと浅く、壁高は4~6cmで、北東隅がゆるやかな傾斜で立ち上がる他は、わずかに湾曲してゆるやかに立ち上がる。床面はほぼ水平である。ピットは壁に沿った床面に9個、北東部に3個の合わせて12個検出されたが、EP 23~25はST 9に属する可能性もある。深さ36cmのEP 26、25cmのEP 20が主柱穴とみられ、他は15cm前後である。炉は確認できなかった。

覆土は中央部のF1と壁周辺のF2に分けられ、F1は炭化物を多量に含む暗褐色シルト、F2は褐色粘土質シルトで、F1から多数の土器・石器が出土した。土器は大木6式を主体としており、本住居跡は縄文時代前期末葉の所産と考えられる。なお床面に接して、あるいはやや浮いた状態で、磨石2、凹石1、石錘2点の出土があった(図版9・10)。

ST 9 平面形は不整の隅丸方形で、南に張り出しをもつ。長軸437cm、短軸344cmで、主軸はN-10°-W、床面積は約10m<sup>2</sup>である。確認面からの深さは10~20cmで、壁高は6~10cmをはかり、わずかに湾曲してゆるやかに立ち上がる。床面は若干西に傾斜するが平坦である。ピットは床面で5個検出したが、ST 8のEP 23~25のうちのいずれかが西壁に沿った柱穴の可能性はある。中央にあるEP 31が主柱穴と考えられる。炉の検出はない。

覆土は2層に分けられ、F1は黄褐色粘土を含む暗褐色シルト、F2は褐色粘土質シルトであるが遺物は少ない。大木5~6式の土器が出土し、ST 8と同様前期末に属する。



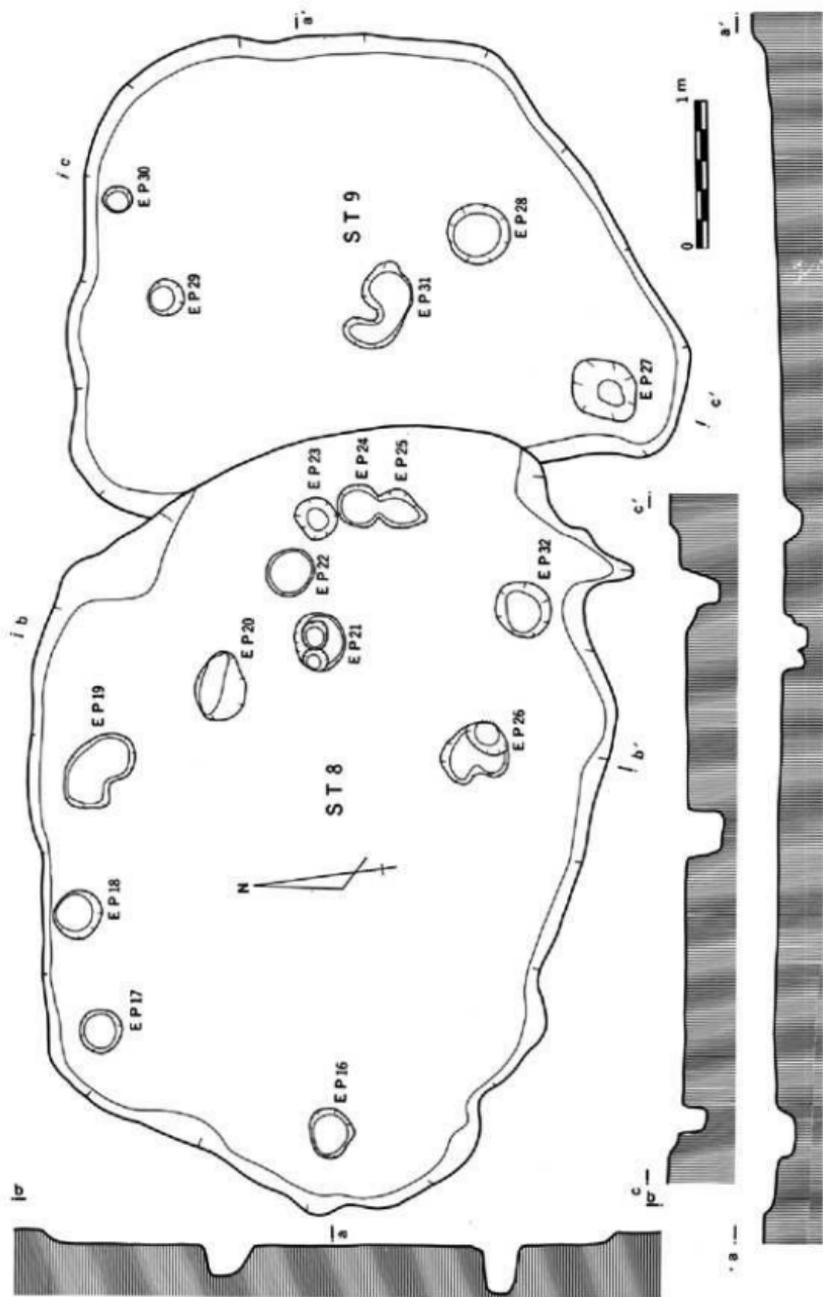
図版9

ST 8出土石錘



図版10

ST 8出土凹石

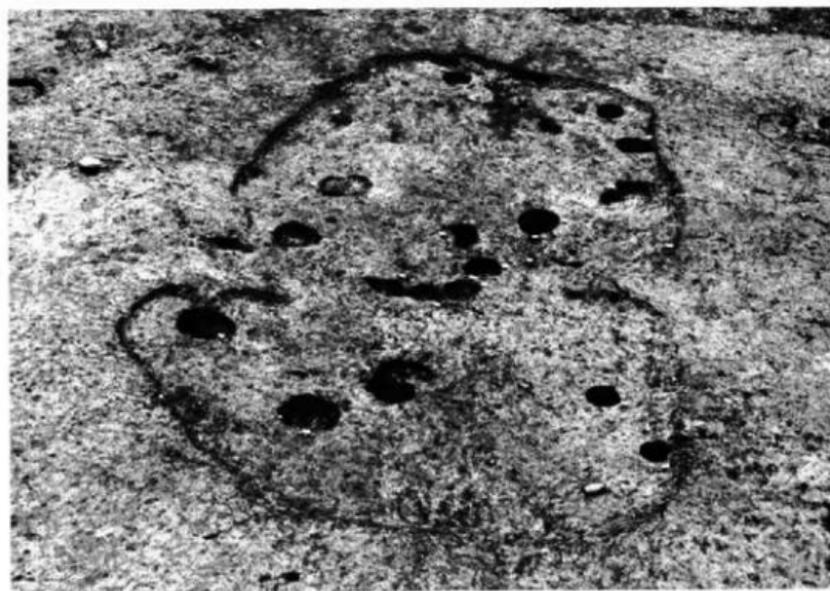


第4図 ST 8・9平面・横断・縦断面



図版11

ST 8・9完掘状況(南から)



図版12

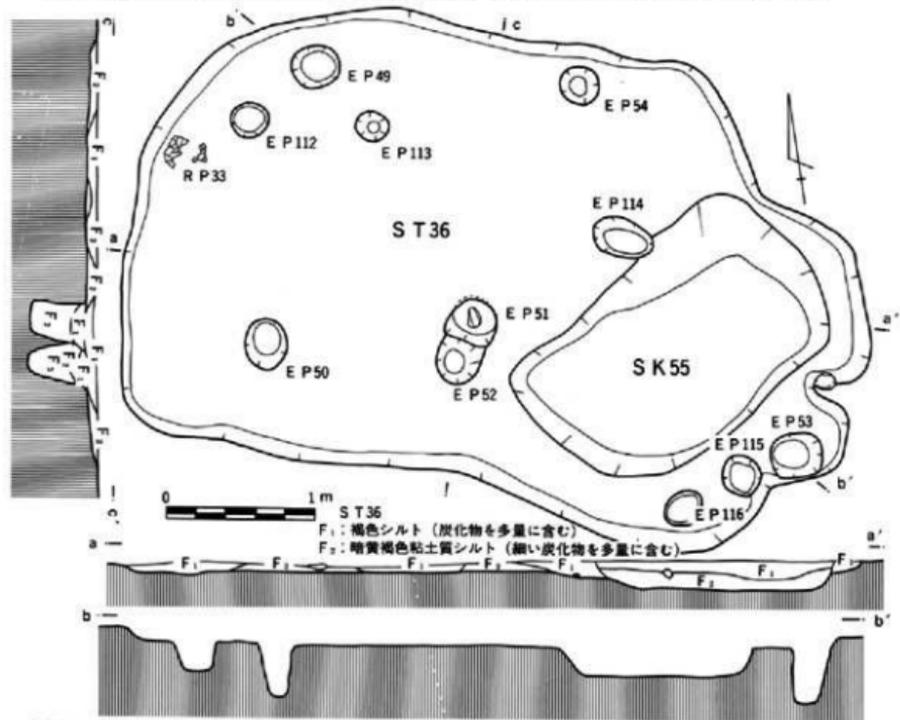
ST 8・9完掘状況(東から)

2) ST36・SK55 (第5図 図版13・14)

調査区のほぼ中央の21~22-29~31区において、III層上面で確認された。SK55がST36を切っている。

ST36 平面プランは隅丸方形で、東南部に張り出しをもつ。長軸510cm、短軸300cmをはかり、主軸はN-68°-Wで床面積は約13.1m<sup>2</sup>である。確認面からの深さは5cmと浅い。ほぼ全周で、わずかに湾曲してゆるやかに立ち上がっている。床面は水平で固くしまっている。ピットは壁に沿って6個、中央に5個の合わせて11個を検出した。このうちEP51、52、53、113が35~39cmと深く、支柱穴になるものと思われる。EP49、50、54、114は20~24cmの深さをもつが、他は浅い。炉の検出はない。覆土は2層に分けられ、F1や床面から、大木6式の土器や石器が出土しており、縄文時代前期末葉の所産と考えられる。

SK55 長方形プラン。長軸212・短軸128・深さ20cmで主軸はN-58°-Eを計る。北隅でゆるやかに、他は急角度で立ち上がる。覆土から大木6式の土器と石鏃が出土した。



EP51  
F<sub>1</sub>: 黄褐色粘土を含む暗褐色シルト  
F<sub>2</sub>: 暗褐色粘土質シルト

EP52  
F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト  
F<sub>2</sub>: 暗褐色粘土質シルト  
F<sub>3</sub>: 暗褐色シルト質粘土

第5図 ST36・SK55

SK55  
F<sub>1</sub>: 褐色シルト (ST36より暗い)  
F<sub>2</sub>: 褐色粘土質シルト (炭化物含む)



図版 13

ST 36・SK 33 セクション



図版14

ST 36・SK 33 完掘状況

### 3) ST10・70、SX117・118、SK71・72、73、74、他(第6図 図版15~21)

調査区の北東隅15~18-26~30区において検出された遺構群である。この地域は遺跡全体の北東隅にもあたり、16-29区付近から北東方向に向けて急激な地山の落ち込みがはじまる。それぞれの遺構の確認面は地山であるIII層上面であるが、地山の高い南側でのプラン確認は割合容易であったが、地山の落ち込む北東側では、各遺構の土色変化が乏しいことも手伝って、その覆土の切合いを面精査の段階で把えることができず、床面精査の段階で切合い関係を確認した。それによると次のような変遷となる。ST10→ST70→SK71→SK72、また、SK74→SX118→SK73の順である。ST70とSX117、そしてSX117と118の新旧関係は把えることができなかった。以下古い順にその概要を記す。

**ST10** 平面プランは隅丸方形で、ST70に切られ、断定はできないが、東南部に張り出しを持つようである。長軸は486cm・短軸は330cmをはかり、主軸方向はN-6°-Eである。床面積は14㎡前後と推定される。確認面から床面までの深さは10~20cmで、壁高は南辺で10cm・西辺で15cm・北辺で8cmで、それぞれがゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。床面は南部から北部にかけて傾斜し、約30cmの高低差をもつが東・西の傾斜はない。ピットは4個検出されたが、EP119で18cm、120で15cm、121で17cm、122で6cmといずれも浅く、支柱穴を特定することはできない。炉は未検出。覆土は暗黄褐色粘土質シルト1層で炭化物が多く含まれていた。この覆土と床面から、多くの遺物が出土している。土器は大木8a式が主体を占めることから住居の時期は縄文時代中期中葉と考えられる。また床面北東部には4個の礫が残り、磨石1個、凹石3個に加え、打製石斧7と、接合可能なその関連資料が大量に出土し、打製石斧製作にかかわる好資料を提供した。

**ST70** 平面プランはおそらく南に張り出す隅丸方形になるものと予想され、その長軸の長さは480cm前後になるものと思われる。確認面からの深さは20cm前後で、南辺に約20cmの周壁が残り、床面はほぼ水平で、南から北にかけて相当の傾斜をもつST10と好対照をなす。ピットは1個検出されたが、8cmと浅く、支柱穴ではないものと思われる。覆土はST10と類似する暗黄褐色シルトの単一層で、この覆土に含まれる土器の大半は大木8a式である。また、石器は磨石1・凹石2・石鏃1などの出土がある。

**SK71** 平面形は不整形円形を呈し、長径252・短径185・深さ15cm、N-42°-Eをはかり、底面は平坦である。覆土は1層で、大木8a式の一括土器や、石鏃の出土がある。



図版 15

ST10 出土石器

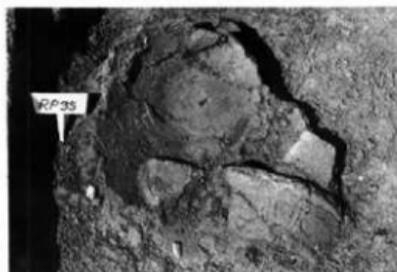
S K 72 不整円形のプランをもち、長径284・短径170・深さ38cm、N-10°-Wをはかる。底面はやや丸味を帯びている。南東部で急傾斜の立ち上がりを見せるが、他はゆるやかに立ち上がっている。覆土は3層に分かれ、各層とも大量の遺物を含んでいる。土器は大木8a式が主体を占め、石器は石鏃3・石錐1・石匙1・打製石斧5・磨製石斧1・磨石1・凹石2とともに剥片・砕片が1000点以上出土している。ここにも接合資料が存在する。

S K 74 S X 118の精査中に検出され、不整円形を呈する。規模は径150・深さ105cmをはかる。底面は平坦で、急傾斜な立ち上がりを見せ、途中に段をもつ。覆土は暗褐色粘土質シルトの単一層で、これに含まれる土器の大半は大木7a式である。

S X 118 西部でわずかな立ち上がりをもつ遺構で、その内部に存在するピットも深く、住居跡の可能性が高いが、確証はつかめなかった。底面は北に向ってゆるやかに傾斜し、ピットの深さはE P 75が50cm、76が80cm、125が29cm、126が9cm、127が14cm、128が17cmである。

S K 73 不整円形のプランをもち、規模は径230・深さ12cmをはかる。底面が平坦でゆるやかに立ち上がる。覆土は2層に分かれ、1層から大木8a式とともに天王山式の土器片が出土し、弥生時代後期の土壌と思われる。

S X 117 一部でわずかな、立ち上がりをもつ遺構で、底面は北に大きく傾斜する。



図版16

S K 72・R P 35



図版17

S K 71・R P 36



図版18

S K 71・72セクション



図版19

S K 72セクション



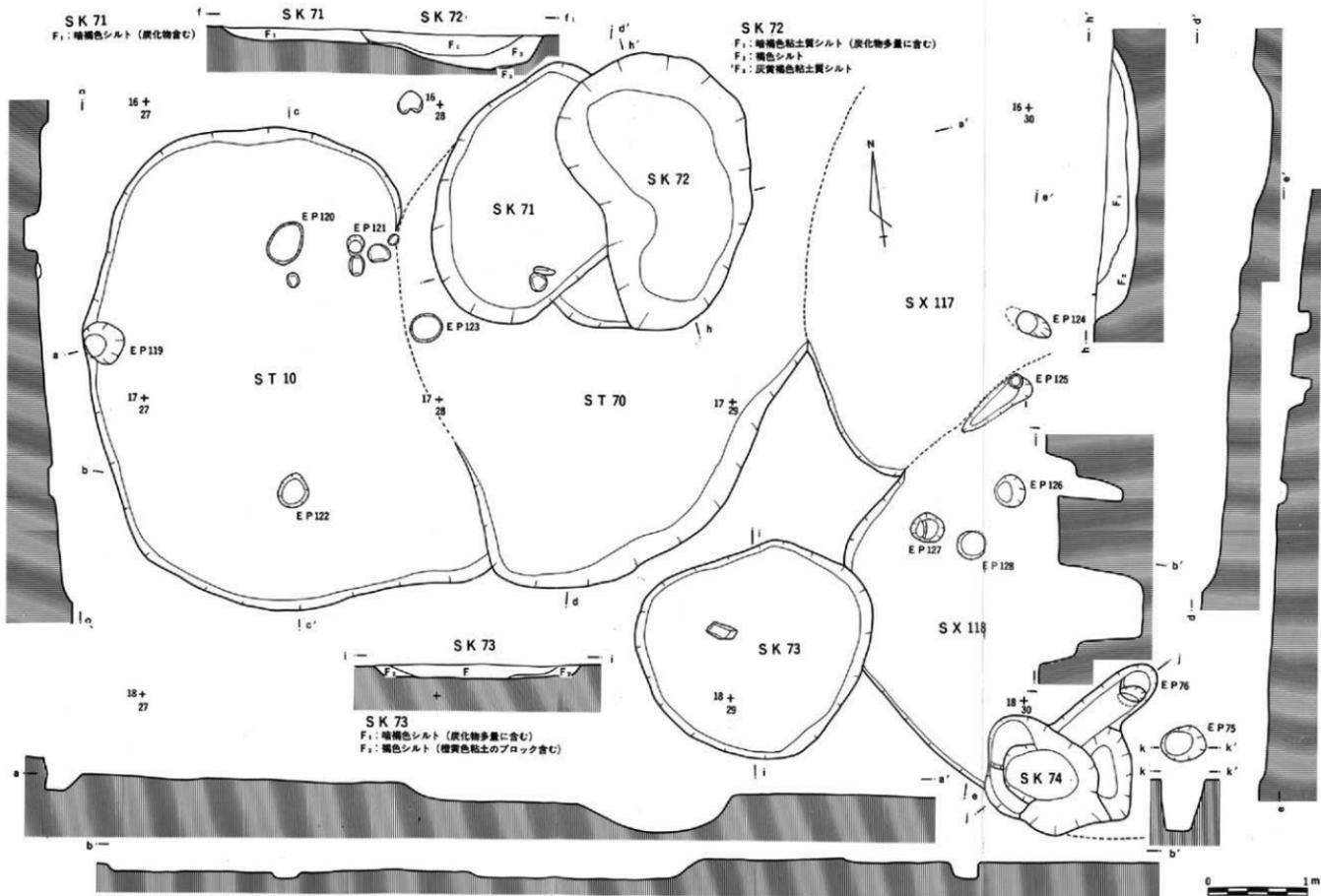
図版20

S T 10・70、S K 71・72・73・74完掘状況（南から）



図版21

S T 70・S X 117・118・S K 71・72・73・74完掘状況（南から）



## 2 土 墳

土墳はすでに述べたものを含め38基を登録した。これらをブロックごとにまとめて以下に記す。

### 1) SK 1、SK 2、SK 3・4、SK 7 (第7図 図版22~24)

#### SK 1

15-23区においてIII層上面で確認した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径110cm・短径96cm・深さ16cmをはかり、主軸方向はN-20°-Wである。底面は平坦で、ほぼ全周でゆるやかに立ち上がる。覆土は4層に分けられるが、遺物の出土はなかった。覆土の堆積状況が、SK2と類似することから、縄文中期の所産と考えられる。

#### SK 2

16-23区においてIII層上面で確認した。平面形は不整楕円形で、長径188cm・短径96cm・深さ24cmをはかり、主軸方向はN-24°-Eである。底面はほぼ平坦で北西部に小ピットをもつ。北西部で急な、他はゆるやかな立ち上がりみせる。覆土は4層に分かれ、大木8a式の土器片が出土した。中期中葉の所産とみられる。

#### SK 3・4

17-12区においてIII層上面で確認された。SK3が4を切り、平面形は両者とも不整円形で、径はSK3で75cm・4で110~120cmをはかる。SK3は底面中央に、SK4は壁に沿って浅いピットをもつ。覆土はSK3で2層、SK4で3層からなり、剥片だけの出土で、所属時期は特定できない。

#### SK 7

20-30区に中心をもつ深さ10cmの浅い不整楕円形の土墳。長径220cm・短径152cm、主軸はN-16°-Eである。底面は平坦で全周でゆるやかに立ち上がる。遺物の出土は



図版22

SK 1セクション



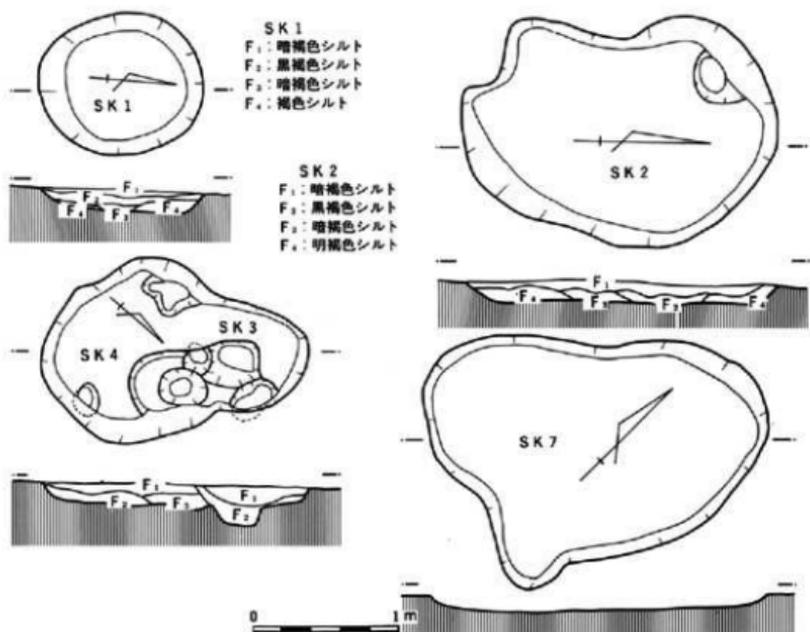
図版23

SK 2セクション



図版24

SK 3・4セクション



第7図 SK 1、SK 2、SK 3・4、SK 7

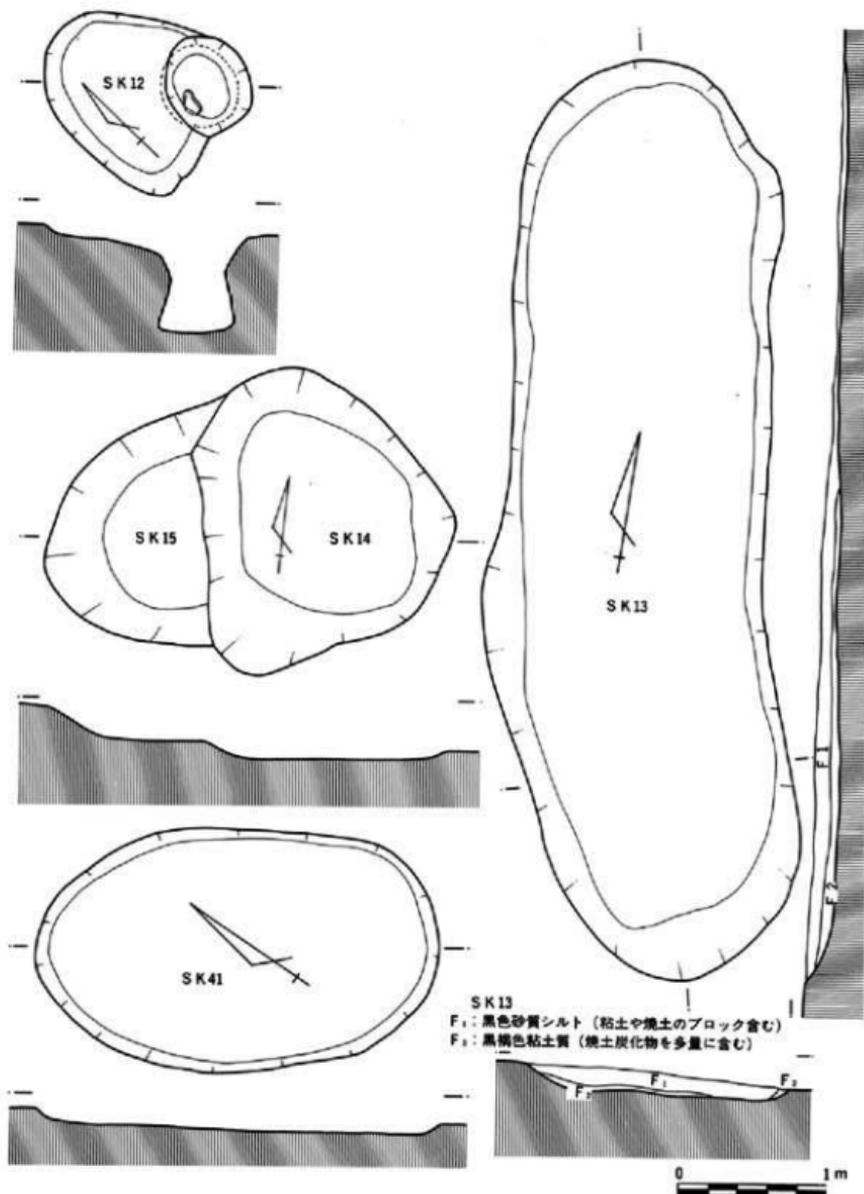
ない。

2) SK 12、SK 13、SK 14・15、SK 41 (第8図 図版 25~28)

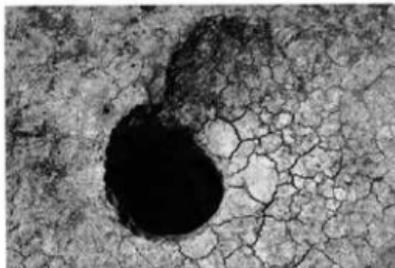
SK 12 調査区の東部26~27-26区で西側に浅い落ち込みを伴う土壌である。袋状になる部分での平面形は長径66cm・短径58cmの楕円形を呈し、その主軸方向はN-40°-Eである。確認面から25cmの深さのところできびれをもち、底面は丸味を帯び、壁に接して礫がのっている。深さは70cmをはかり、覆土は暗褐色シルトの単一層で、大木8aの土器片や、磨石1点打製石斧1点が出土した。

SK 13 SK 12に近接する27~28-26~28区で検出した。長楕円形のプランをもち、長軸632cm・短軸190cm、確認面からの深さは15cmをはかる。主軸方向はN-12°-Wである。全体的にゆるやかな立ち上がりを見せ、底面はほぼ水平で焼けている。覆土は2層観察され、粘土ブロックが大量に含まれていた。大木8a式の土器片、打製石斧が出土しているものの、他の土壌とは趣きを異にし、その性格・所属時期を断定することはむずかしい。

SK 14・15 29-28区に中心をもち、SK 14が新しい。両者とも不整形楕円形を呈する。SK 14は、長軸194cm・短軸190cm、確認面からの深さは20cm、主軸方向はN-27°-Eをはか



第8図 SK12、SK13、SK14・15、SK41



図版25

SK 12完掘状況

る。ほぼ水平な底面からゆるやかに湾曲して立ち上がっている。覆土は暗褐色シルトの単一層で、大木8a式の土器が出土している。SK 15は、その東部が14に切られるが、長径200cm前後・短径160cm前後、主軸方向はN-85°-E前後になるものと思われる。深さは23cmである。底面は平坦で焼けており幾分東方に傾斜し、ゆるやかな傾斜をもって立ち上っ



図版26

SK 13 セクション



図版27

SK 41 セクション



図版28

SK 12、SK 13、SK 14・15、SK 41、EP 42~48 完掘状況

ている。覆土は焼土を多量に含む暗褐色シルトの単一層で遺物の出土はない。

#### S K 41

29～30-27～28区で検出した。長楕円形プランをもつ土塚で、長径274cm・短径166cmをはかり、確認面からの深さは8cm前後である。主軸方向はN-38°-Eをはかる。全周でゆるやかに湾曲して立ち上がり、底面はほぼ水平である。覆土は褐色シルトの単一層で、大木8a式の土器片多数と、大木8b式の土偶2点、石器では、石錐・石匙・磨石が各1点出土している。大木8b式期の所産とみられる。

#### 3) S K 33 (第9図 図版29～35)

23-32区で検出した長径219cm・短径206cm・深さ18～22cmの不整円形の土塚で、主軸方向はN-7°-Eである。底面に深さ8～24cmのピット4個をもち、南北断面は鍋底状を呈し、東西断面はほぼ水平である。北東側でやや急傾斜に、他ではゆるやかに立ち上がっている。覆土は2層に分けられ、各層、そして底面から、一括土器3個体を含む、大量の土器・石器が出土した。一括土器は北西隅から投棄されたものと判断できる。これらの土器は大木6式に比定できる。石器は磨石3・凹石・線刻礫・石錐・石錐各1の出土がある。



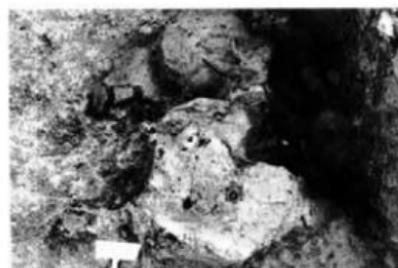
図版29

S K 33 R P 17出土状況



図版30

S K 33 R P 18出土状況



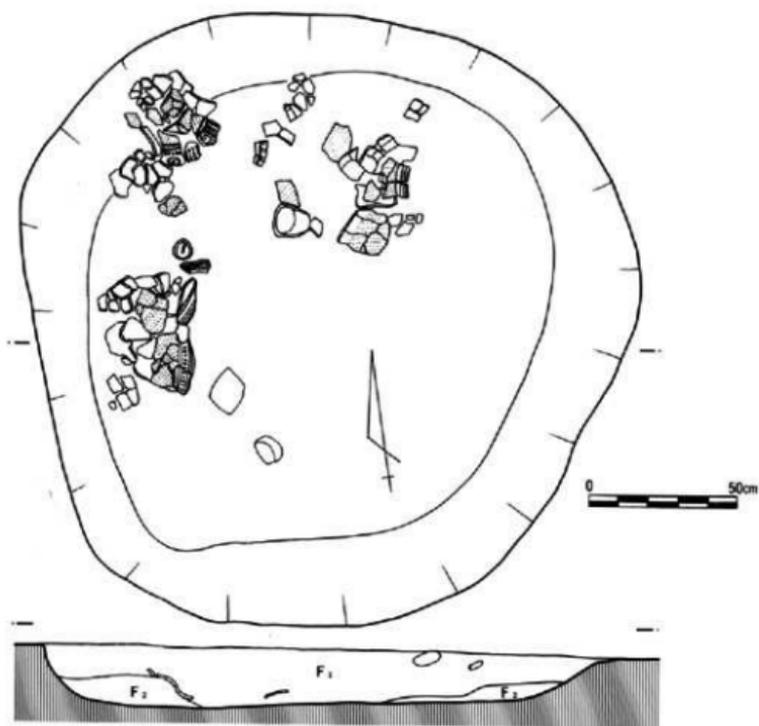
図版31

S K 33 R P 19 出土状況



図版32

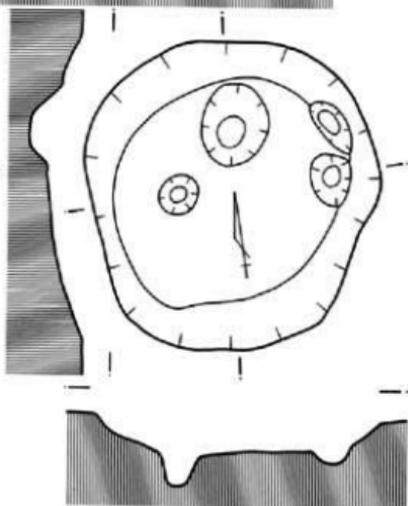
S K 33 南北セクション



SK 33  
 F<sub>1</sub>: 褐色粘土質シルト (炭化物・焼土を含む)  
 F<sub>2</sub>: 暗褐色砂礫混りシルト (焼土・炭化物をわずかに含む)



図版33 SK 33東西セクション



第9図 SK 3平面・断面図



图版34

S K 33土器出土状况(1)



图版35

S K 33土器出土状况(2)

#### 4) S K 37~40, S K 102 他

##### S K 37

27-30区に中心をもつ径170cm前後、深さ10cmの円形プランの土壌で、底面は平坦で、ゆるく湾曲して立ち上がる。覆土は2層に分かれ、大木 8a 式の土器と剥片が数点ずつ出土。

##### S K 38・119・120

S K 38を119、120が切るが、119と120の間の先後関係はつかめなかった。S K 38は長軸280cm・短軸170cm前後、主軸方向がN-70°-W前後の不整楕円形になるものと思われ、底面は平坦で、深さは14cm、ゆるい傾斜をもって立ち上がる。S K 119は径110cm前後、S K 120は径125cm前後の略円形の土壌で共に鍋底状の底面を有し、深さはそれぞれ20cm、40cmをはかる。S K 38・120から、大木 8a 式の土器と剥片が出土している。

##### S K 39

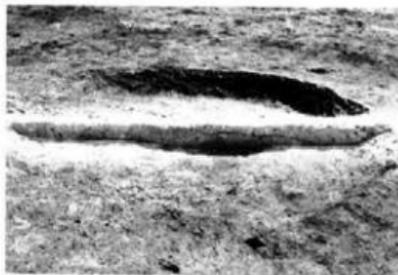
24-28区に中心をもつ径150cm前後の円形プランの土壌で、底面に落ち込みをもち段差がある。立ち上がりは北側で急傾斜となっている。覆土は6層からなり、剥片が出土している。

##### S K 40

23-24-27-28区で検出した、径140cm前後の不整円形の土壌で、深さは36cm、底面は鍋底状を呈しゆるい湾曲をもって立ち上がる。覆土から大木 7a 式の土器片が出土した。

##### S K 56・101・102・E P 57・100・103

3基の土壌・3基のピットの切合いで、E P 57・100・S K 101→S K 56→S K 102・E P 103の変遷が確認された。S K 101は深さ15cmの浅い掘り込みをもつ。S K 56は径110cmの円形プランで、深さ22cm、平坦な底面をもち、ゆるやかなカーブを描いて立ち上がる。S K 102は長径94cm・短径62cm、深さ68cmの楕円形プランで主軸方向はN-49°-Eをはかる。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がっている。E P 57・100は、S K 51の底面で確認され、そこからの深さは、E P 56で10cm・100で17cmをはかる。E P 103は途中で段をもち深さは74cmをはかる。S K 56・E P 57から、それぞれ数点の剥片が出土しているだけで、時期は特



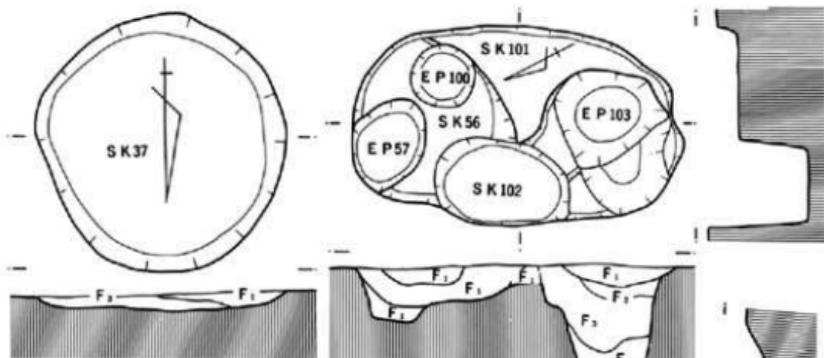
図版36

S K 37セクション



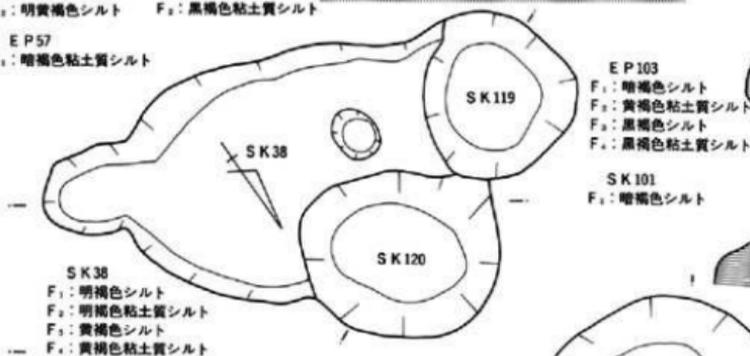
図版37

S K 37・120セクション



SK37 SK56  
 F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト  
 F<sub>2</sub>: 明褐色シルト F<sub>2</sub>: 黒褐色粘土質シルト

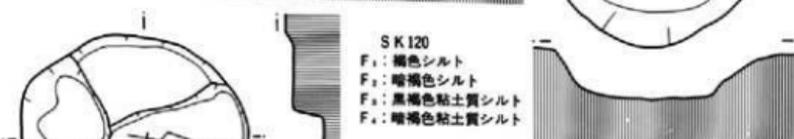
EP57  
 F<sub>1</sub>: 暗褐色粘土質シルト



EP103  
 F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト  
 F<sub>2</sub>: 黄褐色粘土質シルト  
 F<sub>3</sub>: 黒褐色シルト  
 F<sub>4</sub>: 黒褐色粘土質シルト

SK101  
 F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト

SK38  
 F<sub>1</sub>: 明褐色シルト  
 F<sub>2</sub>: 明褐色粘土質シルト  
 F<sub>3</sub>: 黄褐色シルト  
 F<sub>4</sub>: 黄褐色粘土質シルト



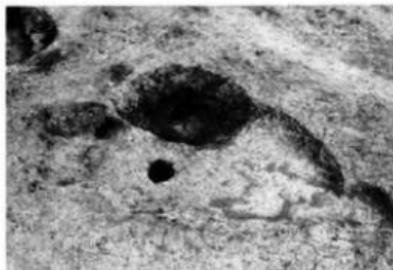
SK120  
 F<sub>1</sub>: 褐色シルト  
 F<sub>2</sub>: 暗褐色シルト  
 F<sub>3</sub>: 黒褐色粘土質シルト  
 F<sub>4</sub>: 暗褐色粘土質シルト

SK39  
 F<sub>1</sub>: 暗褐色シルト F<sub>4</sub>: 黒褐色シルト  
 F<sub>2</sub>: 褐色粘土質シルト F<sub>2</sub>: 黒褐色砂質シルト  
 F<sub>3</sub>: 暗褐色粘土質シルト F<sub>3</sub>: 明褐色シルト



第10図 SK37、SK38・119・120、SK39、SK40  
 SK56・101・102・EP57・100・103

図版38 SK37完掘状況



図版39 SK 38・119・120完掘状況



図版40 SK 39完掘状況



図版41 SK 40完掘状況



図版42 SK 56・101・102・EP 57・100  
・103完掘状況

定できない。

#### 5) 19～22—25～27区検出の土壌群 (第11図 図版43～51)

ST 8・9の北東方向にある地山の落ち込みにトレンチを入れて確認された遺構群で、一部はトレンチ外にも延びるが、調査期間の関係で拡張精査を行っていない。

#### SK 78

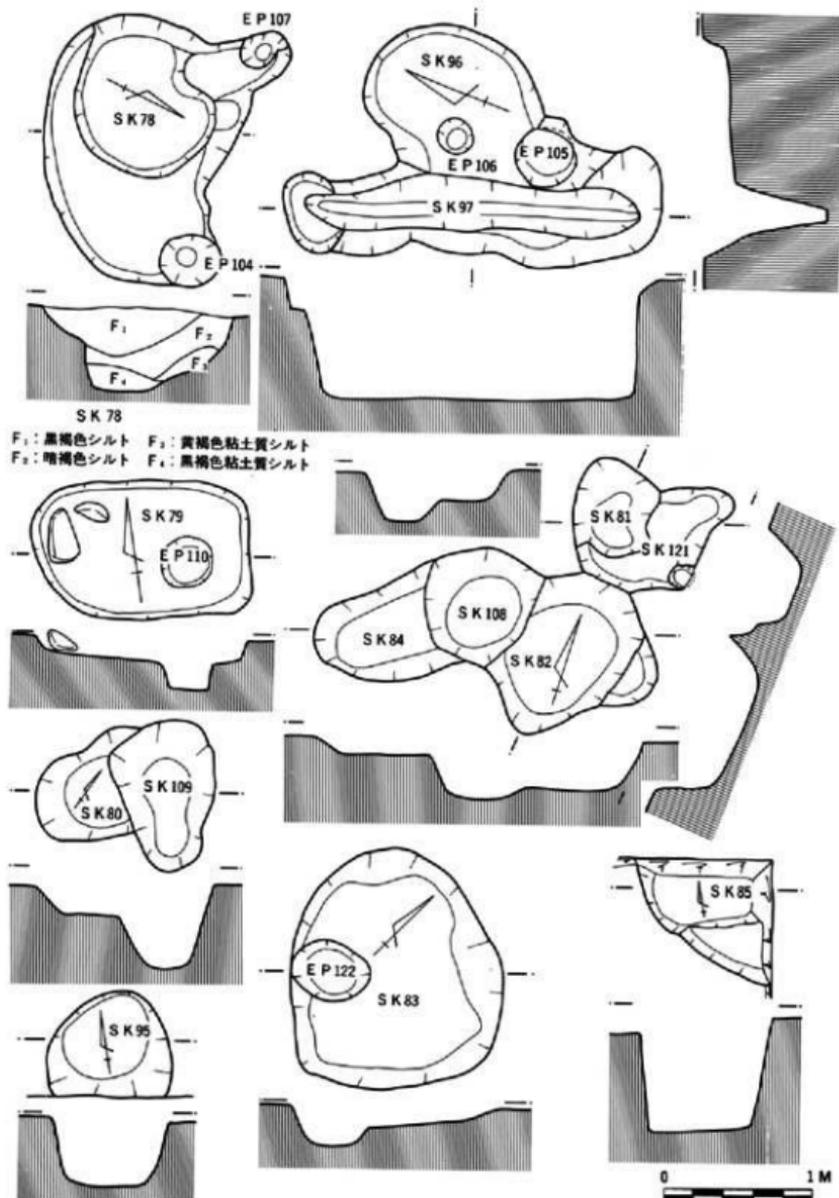
浅い落ち込みを伴う径95cm前後、深さ56cmの不整円形のプランをもつ土壌で、底面は南部に片寄って低くなり、北部でゆるやかに、他では急傾斜で立ち上がる。覆土は4層からなるがスクレーパーと剝片が数点出土しただけで、時期を特定することはできない。

#### SK 79

隅丸方形のプランをもち長軸145cm・短軸94cm・深さ17cmをはかり、主軸方向はN-97°-Wである。底面はほぼ水平で西方でゆるやかに、他は急傾斜に立ち上がる。底面の西部に2個の河原石がのり、底面でEP 110が検出された。遺物の出土はない。

#### SK 80・109

109が80を切り、両者とも不整楕円形を呈する。109は長径102cm・短径64cm・深さ60cmで主軸



第11図 SK 78、SK 79、SK 80・109、SK 81・121、  
 SK 82・84・108、SK 83、SK 85、SK 95平面・  
 断面図

方向はN-39°-Wである。底面は中央くぼみ、湾曲して立ち上がる。80は長径80cm・短径60cm前後で、深さは19cm、主軸方向N-43°-Eをはかる。底面は平坦でゆるい傾斜で立ち上がる。大木6式の土器片と剝片数点が出土。

#### S K 81・121、S K 82・84・108

121→81、82・84→108の新旧関係がある。S K 81は径63cm・深さ30cmの不整形円形を呈し、底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。S K 121は長径95cm・短径65cmの不整形円形で主軸はN-42°-Eである。深さ20cmと浅く底面は平坦である。S K 82は径100cm前後の不整形円形のプランをもち、底面は平坦でゆるやかな立ち上がりをみせる。深さは34cm。S K 84は長径132cm・短径70cm前後の長楕円形のプランをもち、主軸はN-59°-Eをはかる。深さ12cmで、底面は平坦、ゆるやかな傾斜で立ち上がっている。S K 108は径76cmの円形プランをもち、深さ42cmで、底面は鍋底状を呈する。S K 82 から大木7a式の土器の出土がある。

#### S K 83

径150cm前後の不整形円形を呈し、底面は丸みを帯び西部の壁ぎわでE P 122に切られている。縄文時代中期の土器片と、スクレーパー、剝片が出土している。

#### S K 85

トレンチ北東隅にかかる土塚で一部のみ検出。深さは70cmをはかる。遺物の出土なし。



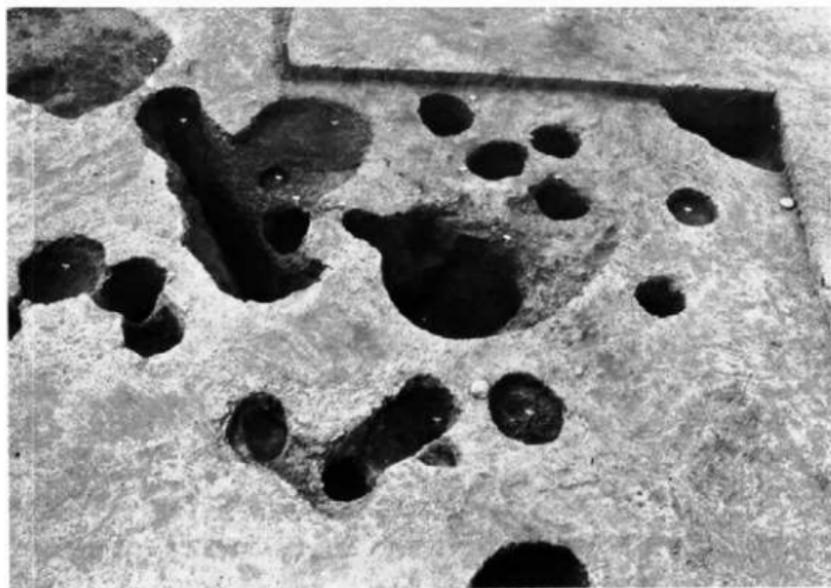
図版43

中央部遺構群



図版44

中央部遺構群北半



図版45

中央部遺構群南半

S K 95

トレンチ南壁にかかる円形の土墩で径86cmをはかり深さは48cm、底面は平坦で、湾曲しながら急傾斜で立ち上がる。遺物の出土はない。

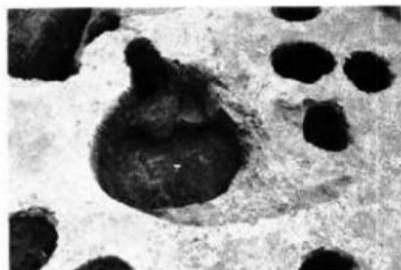
S K 96・97

97が96を切る。S K 96は長径140cm・短径105cmの楕円形プランをもち、主軸方向はN-20°-Eをはかる。底面は平均でゆるく湾曲して立ち上がる。深さ20cm。S K 97は、いわゆるTピットで1基だけの検出である。長軸256cm・短軸50cm、主軸方向はN-21°-Wである。確認面からの深さは88cmをはかり、底面は平坦で急傾斜で立ち上がり底面から55cm付近でくの字状に折れ曲がって上面に達する。出土土器から大木8a式期の所産と考えられる。



図版46

S K 78層 セクション



図版47

S K 完掘状況



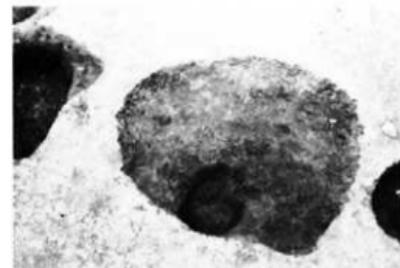
図版48

S K 79完掘状況



図版49

S K 80・109、S K 81・121、  
S K 82・84・108完掘状況



図版50

S K 83完掘状況



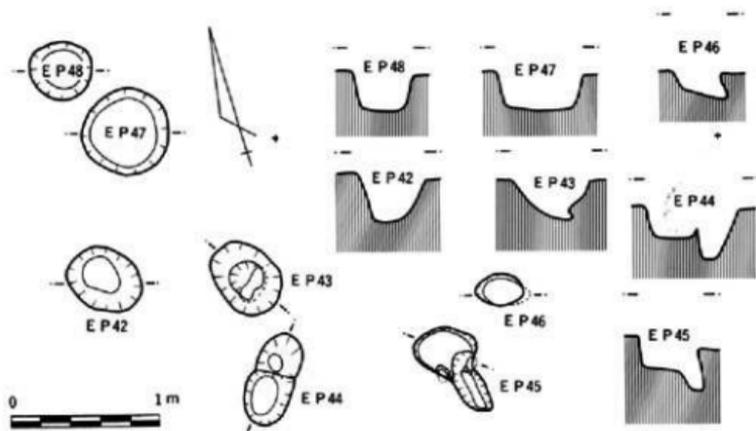
図版51

S K 96・97完掘状況

### 3 ビット群

#### 1) 28-29区を中心とするビット群 (第12図 図版28)

調査区の東部、SK 13、14・15、37等に囲まれる範囲で、EP 42~48の6個のビットが検出された。確認面はⅢ層上部で覆土はいずれも炭化物を多量に含む褐色シルトで、上部に焼土が含まれていた。このうちEP 43、45、46はいずれも南東部でオーバーハングする同形態のもので底面は傾斜をもつ。深さは16~35cmをはかるが、30cm前後のものが多い。住居に伴う柱穴の可能性がある。



第12図 28-27区を中心とするビット群

#### 2) 19~22-25~27区検出のビット群 (第13図 図版43~45)

土壌との切合いや、ビット同士の切合いを含め、24基のビットが検出された。これらのうち、全く同じ覆土をもつものは少なく、EP 87と91、EP 88と90の二組で、その深さも共通する。しかし、残りの大半は、土色・含有物がまちまちで、数時期のものが重なりあっていると思われる。仮に底面の絶対高を基準として分類すると次の5グループに分けられる。EP 87、91、105、107(原点-50cm以上)、EP 65、66、68、92、93、106(原点-49~40cm)、EP 67、86、88、90、94、104(-39~30cm)、EP 62、64、89、99、98(-29~20cm)、EP 59、60、61(-19cm以下)である。

遺物は、EP 88、91で土器片が数点ずつ出土しているが、いずれも細片のため、その時期は決定できない。なお、石器はEP 65、68、88、91、92、93、105、107から、剥片が出土している。



#### 4) 埋設土器

26—20区で検出した。掘り方は径43cm前後の円形プランをもち、深さは40cmをはかる。土器はビット状の掘り方ある程度埋め戻してから設置されている。掘り方ならびに土器内部の覆土は次のようになっている。F<sub>1</sub>:暗褐色粘質シルト(礫・炭化物含む)、F<sub>2</sub>:暗褐色粘質シルト(5mm大の炭化物を含む)、F<sub>3</sub>:暗褐色粘質シルト、F<sub>4</sub>:褐色粘質シルト(クルミ・トチ皮等を多量に含む)、f<sub>1</sub>:褐色粘質シルト(5mm大の炭化物含む)、f<sub>2</sub>:暗褐色粘質シルト(F<sub>2</sub>に似る)。

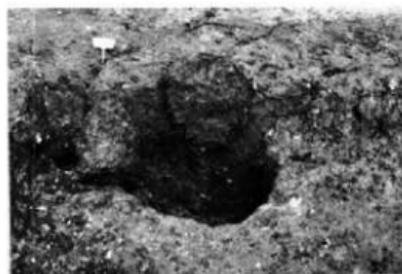
土器は弥生時代後期の天王山式の甕であり、埋設土器構築の年代は弥生時代後期と考えられる。本遺跡の弥生土器は、この他にSK73の覆土から甕形土器口頭部破片が1点出土しているだけである。なおF<sub>3</sub>からはI a類の石錐の出土があるが、これが弥生時代のもとの断定することは困難である。F<sub>4</sub>出土のクルミは、すべて半截されたもので、オニグルミとみられる。



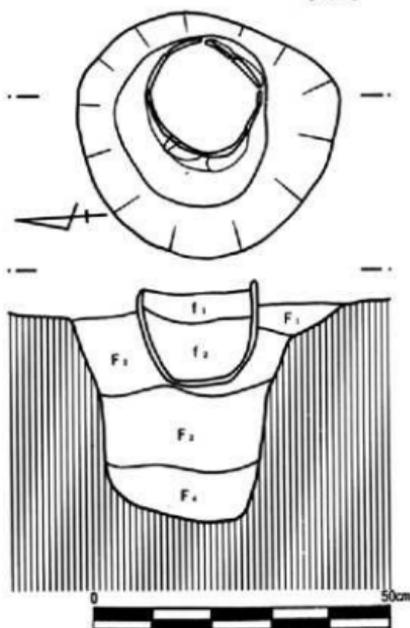
図版52 E U 111ビット内出土、トチ(左上)クルミ



図版53 E U 111側面



図版54 E U 111セクション



第14図 E U 111平面・断面図

## IV 遺 物

### 1 土 器

今回の発掘調査で出土した遺物は、整理箱に約131箱を数えうち土器59箱である。土器片は、第II層褐色シルト（第III層の漸位層である）に包含されたものや、遺構内から出土したものなど、土器の遺存状態が悪く、二次的に磨耗が著しく判別しにくい状態である。

時期は、縄文時代前期末葉から中期中葉にかけての時期が最も多く、各型式別の割合を概括すると大木6式19%・大木7a式11%・大木7b式22%・大木8a式48%・大木8b式2%となる。その他、弥生時代後期の土器がSK73より土器片1点と埋設土（EU111）が出土し、平安時代後半の赤焼土器の破片が6点ほど表採されている。またSX35は、調査区東部中央の鞍部にあり、幅約6m・長さ15mにわたって不整形を示す落ち込みとなっている。ここに、縄文時代中期大木8a式期の段階で遺物の廃棄現象がみられる。

土器片の分類は、縄文時代前期末葉から中期中葉までと弥生時代後期とを一括して第1群土器から第6群土器まで大別して、それぞれの表出された技法および文様で細分し、類別化した。完形土器については、個体数が少ないため、土器片の類別化したものに対象させて示した。なお、平安時代後半の土器片については、調査区外からの表採で、点数も少ないことから、本稿では、割愛した。

#### 1) 土器片の分類 (図版55~70)

##### 第1群土器 (図版61~66)

縄文時代前期末葉に位置づけられ、円形竹管あるいは半截竹管などや絡条体の圧痕を用いて、円形・山形・鋸歯状文・爪形文などの文様を描き出し、土器の口縁部から頸部にかけて文様帯が構成され、そのほとんどが深鉢形土器を呈し、口縁部がやや外反している。

##### 1a類土器 (図版55-9~13・16 図版56-1・2 図版57-1・2・8~10・14 図版61-1~11)

器形は深鉢形を示す土器である。半截竹管による連続する爪形を施し、円形文・曲線文・山形文などを描出している。図版55-9~12は同一の個体で、小破状口縁の破状部に渦巻文を、他は口唇部から頸部まで直線の文様を描出している。円形および重弧状になるものは図版61-1~3・6・10で、山形文は図版56-1・2・図版55-13・図版61-4であり、図版57-1・2・図版61-5・7・8は平行な文様が施されている。文様は、これら円形・曲線・山形文などの組合せによって構成され、口縁部に主体的に施され、平行線で

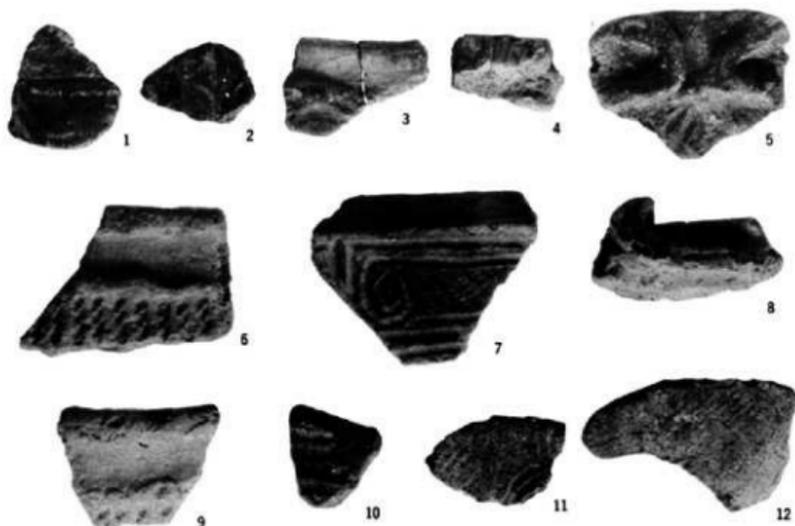
頸部と胴部とを区画している。色調は、図版55-9~12と図版61-9・11が褐色を呈すほかは暗褐色である。胎土には砂粒子が多く含まれ、若干繊維を含むものとして図版55-16・図版61-1~3・図版57-8~10がある。図版61-11は焼成がよく、堅くしまっている。

1b類土器 (図版57-4・5 図版61-12~24)

1~2mm程度の細い粘土紐を貼り付けるものと、やや太い4~5mmの粘土紐を貼布するものがあり、いずれもその上から半截竹管によって連続的な爪形を施している。器形はほとんどが深形土器を呈し、文様構成も口縁部から頸部にかけて描出されている。図版61-24は胴部上半部の破片で、重弧になるように施され、中央が若干抉り取られている。細い粘土紐を山形に施すものとしては、図版57-4・5と図版61-16~19・21~22があり、図版61-12は縦に走り四角形に区画される。また図版61-20は平行に施されている。やや太い粘土紐を施すものとして図版61-13~15があり、口縁部にみられる。文様帯は、1a類土器と同様で口縁部から頸部にかけてみられ、横位方向の単位文様として構成されている。胎土は、砂粒子が多く混り、若干繊維が含まれるものもある (図版61-15・21)。

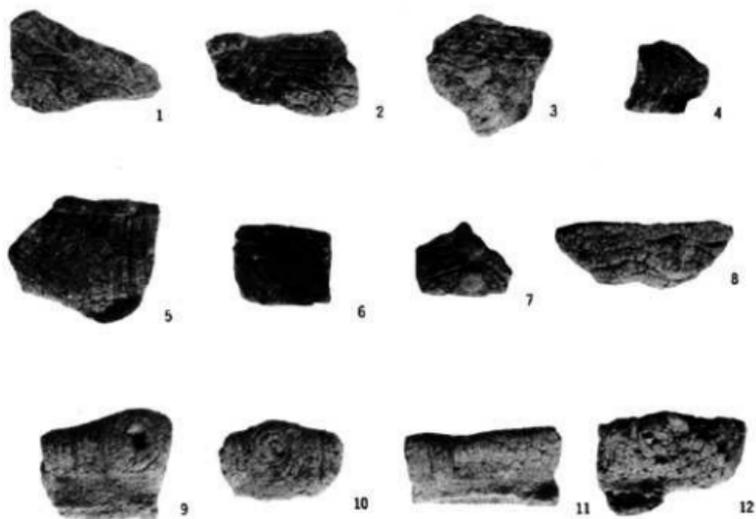
1c類土器 (図版59-1 図版62-1~15)

文様の施文方法は1a類に類似しており、半截竹管によって沈線を施しその間に半截竹管の爪形を連続して施すものと、半截竹管あるいは円形竹管を刺突状に連続するものとが

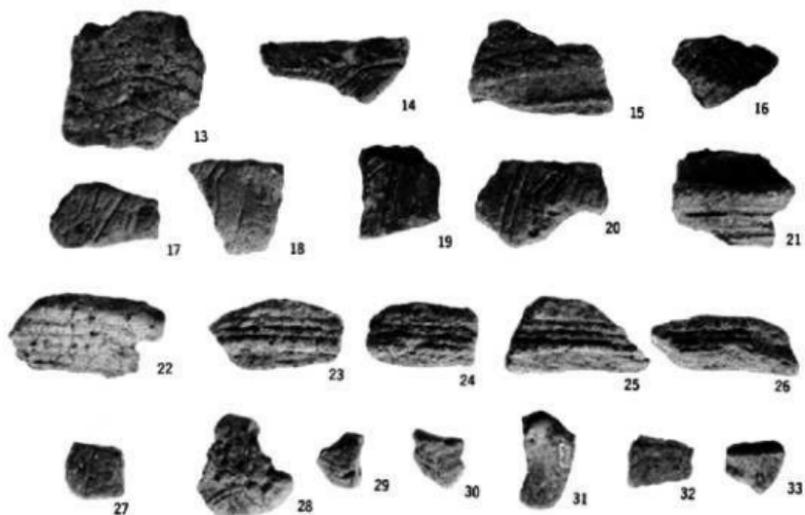


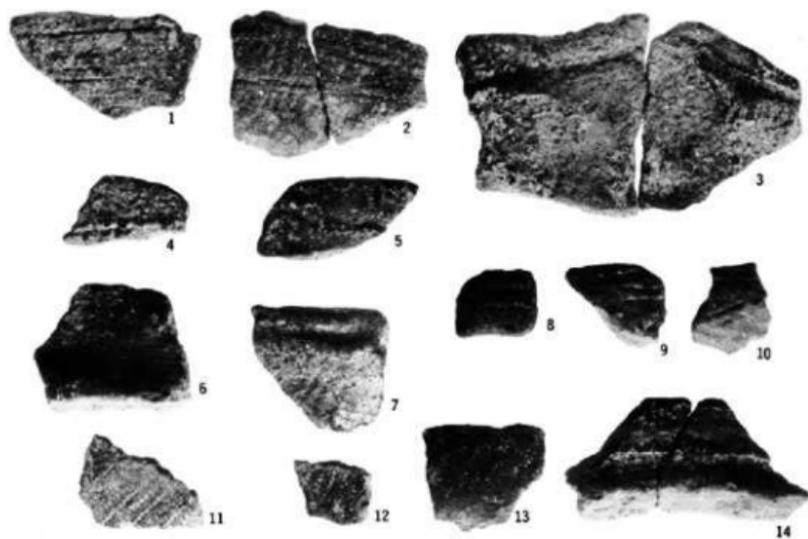
図版56

S T 10 覆土中

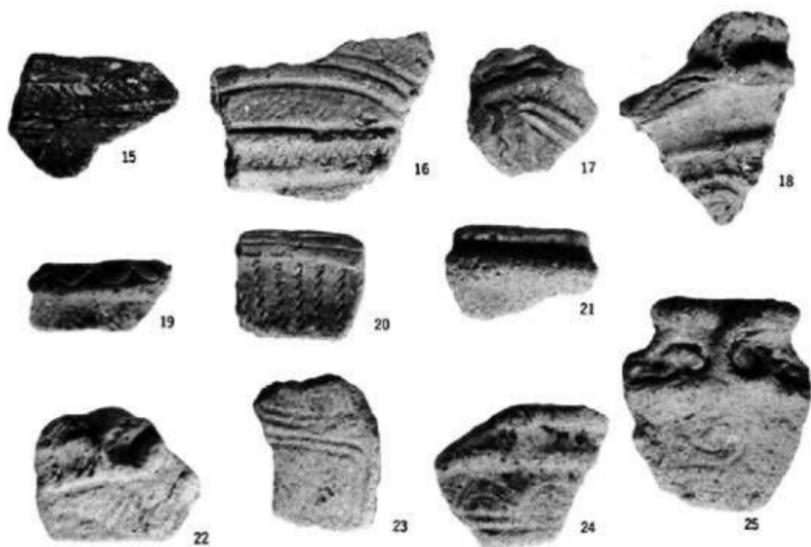


ST 8 覆土中

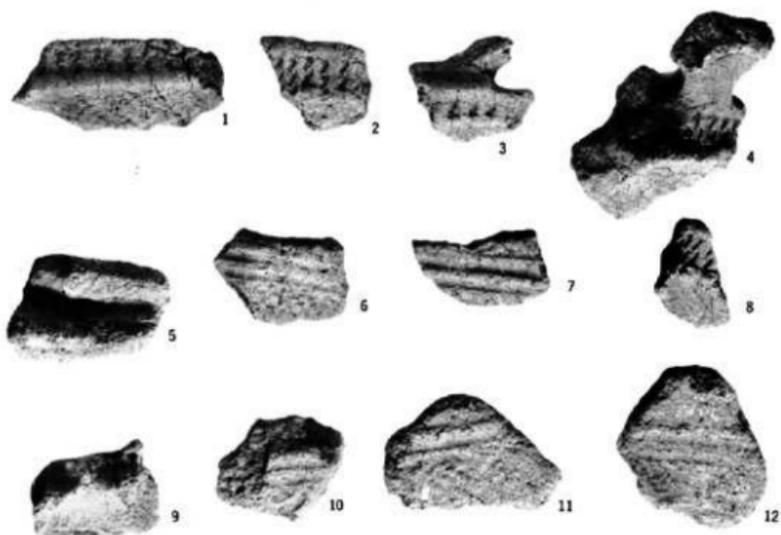




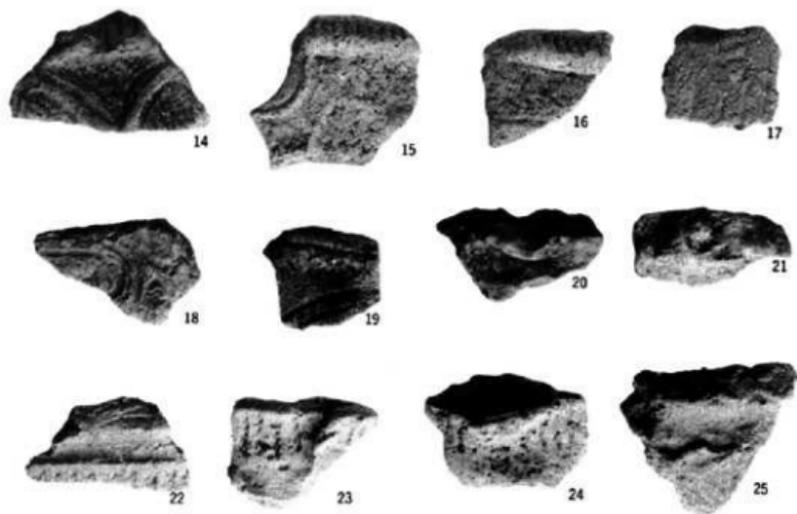
S T 36覆土中

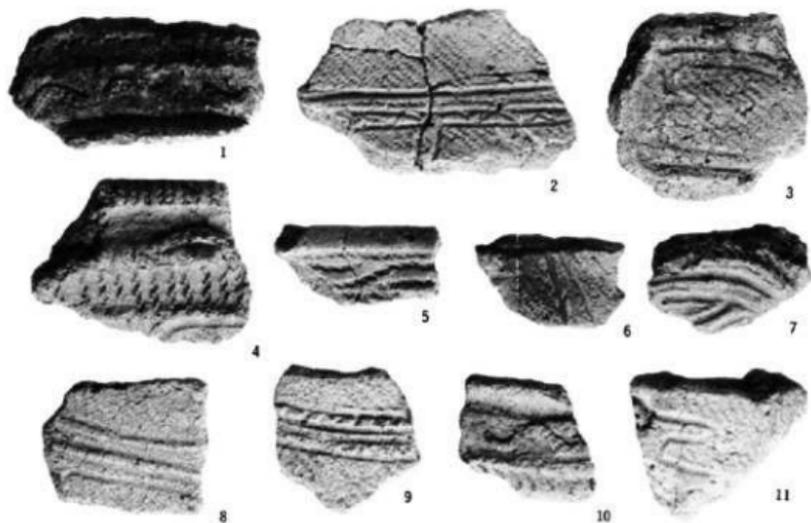


S T 70覆土中

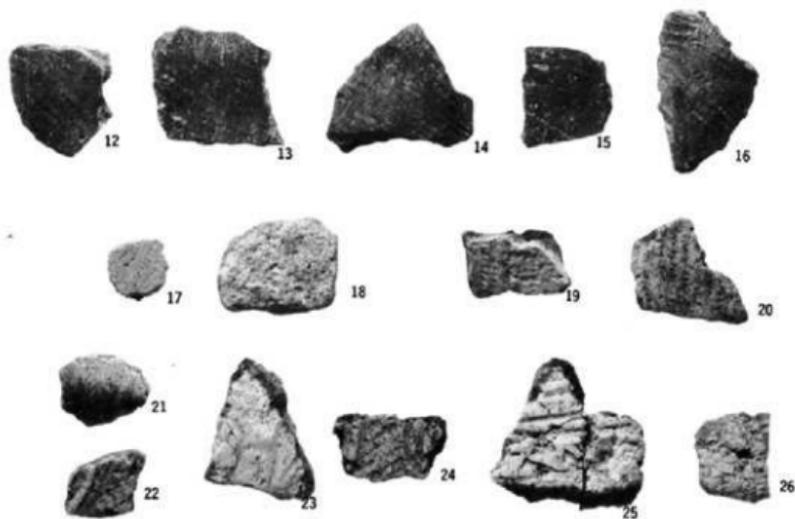


SK14覆土中





S X 35出土

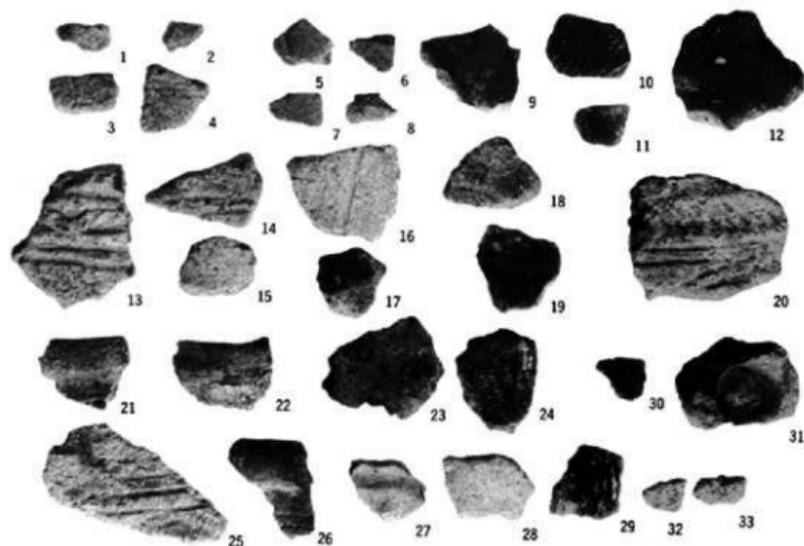


ある。前者は、図版57-4・5・図版62-1~3・9・10であり、いずれも頸部に平行に施されており、1b類土器にみられる細い粘土紐を波状に貼付し爪形が施され、図版62-1~3の口縁部には円形状の突帯がみられる。後者は、図版62-4~8・11~15であり、図版62-5~8は口唇部に爪形があり、図版62-11~15は半載竹管または円形竹管を渦巻状に施している。土器の色調は、暗茶色を呈するものが図版62-9であり、その他は黒褐色である。胎土は砂粒子を多量に含み、繊維を含むものは図版62-1・15である。本類の中でも、沈線の間には爪形がみられるものは、頸部に主体的に施され、体部文様との区画を明確にしている。

1d類土器 (図版55-1~8・14・19・27~30 図版57-3 図版60-26  
図版63-1~11)

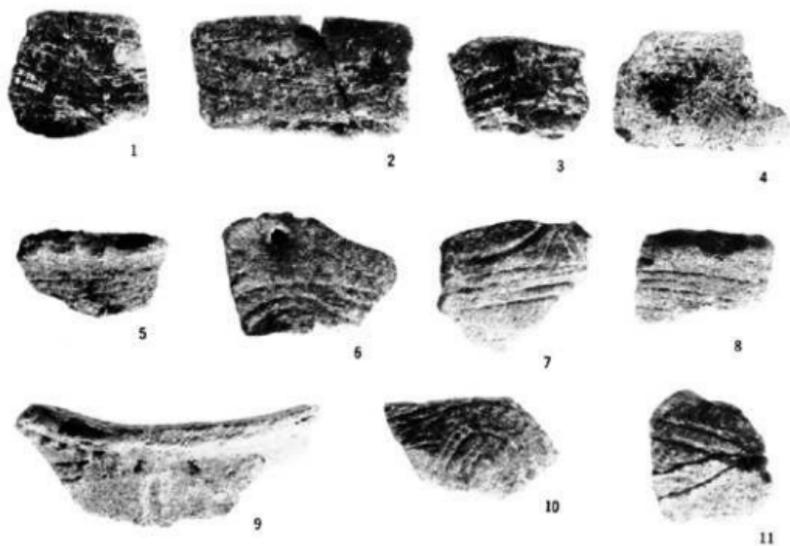
本類は半載竹管の沈線による施文方法が用いられ、1a~1c類に共通する文様が描出されているが、平行沈線と組合された波状・鋸歯状・重三角文などが描出されている。

器形は、深鉢形になり胴上半部から下部にかけて直線的になる。文様構成は、頸部から胴上半部まで主体的に描出され、器面に対して横位方向に展開している。図版55-7には円形の浮文が施されている。波状になるのは図版55-1・3・8・図版63-1・9・10・11で、うち図版55-1は頸部にみられ、図版63-10・11は胴部にみられ平行沈線で区画

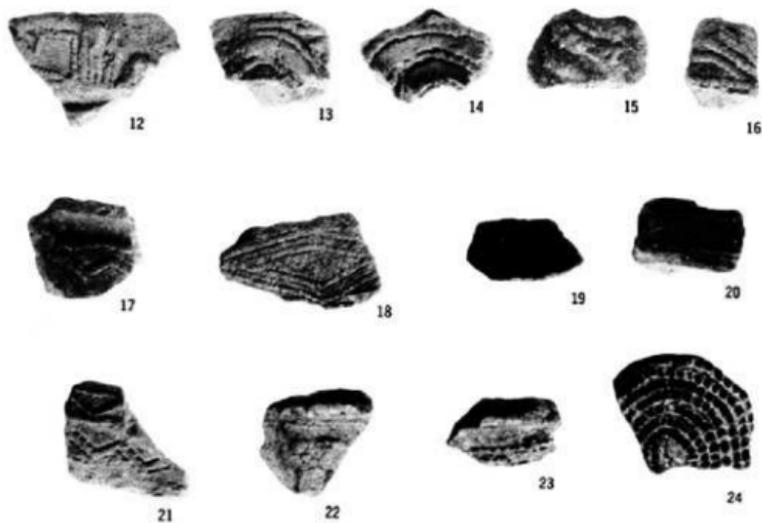


図版60

S K 37・38・40・73・14・80・83・97覆土中  
1~4: S K 37・5~8: S K 38・9~12: S K 40  
-42- 13~20: S K 73・21~24: S K 14・30~31: S K 80  
25~29: S K 97・32・33: S K 83



包含層出土第1群a類土器



包含層出土第1群b類土器

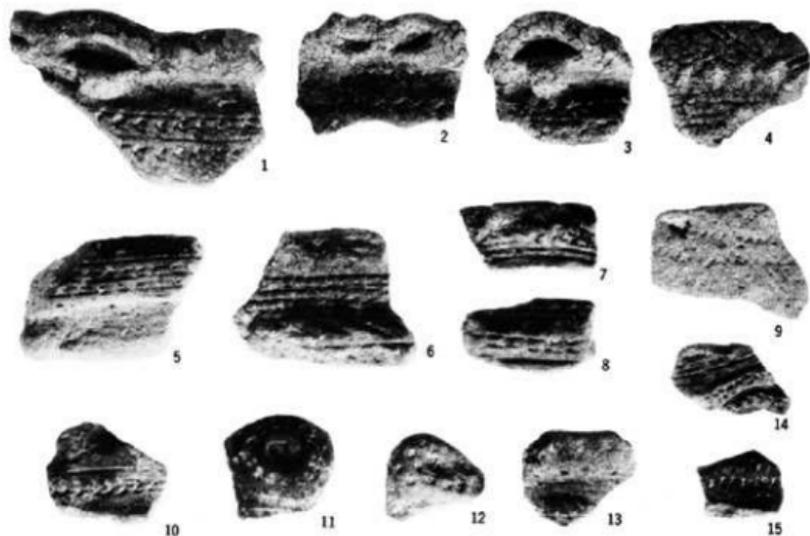
された中に施されている。鋸歯状になるものは図版55-2~4・6・図版63-2~4・8であり、重三角文として区画されるものは図版55-5・図版63-5~7である。胎土は、砂粒子が多く含まれる。色調はほとんどが暗茶褐色である。

1 e 類土器 (図版55-15・21 図版63-12~19)

器面の口唇付近や口縁部あるいは頸部付近に捺糸圧痕や絡条体による圧痕が、平行・曲線の・縦位に施される。図版63-16は口唇付近に曲線的に施され、頸部にも1条描き出される。図版63-17も同様であり粘土紐を貼付する前に施されている。頸部に施されるものとして図版55-15・21・図版63-12~14があり、2~4条の捺糸の圧痕がみられる。図版63-18は三角形に区画している。図版63-19は口唇直下から3条の絡条体圧痕が平行に施されている。器形は図版63-12~16・19が深鉢形土器で、口縁部がやや外反し胴部に最大径をもち大きく膨らみ、胴下半が直立するキャリパー形になる。色調は暗茶褐色や黒褐色となり、胎土には砂粒子や石英粒が含まれる。

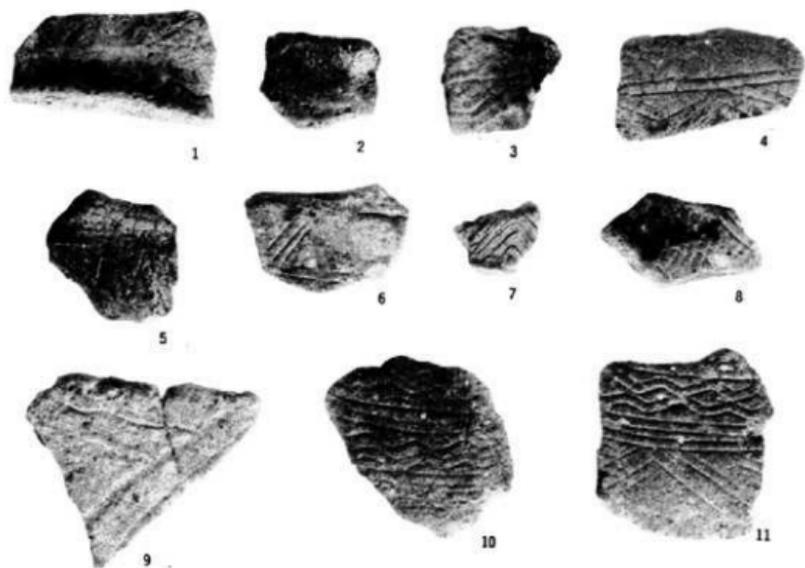
1 f 類土器 (図版64-1~10)

器形は深鉢形土器を呈し、とくに1~3は胴部が最大に膨らみ胴下半部が直立するキャリパー形を示す。粘土紐による隆帯を基調として、楕円形(9)や円形(5・6・10)および方形(4・7)の区画を描出し、横位方向の文様構成になっている。1~3は口唇

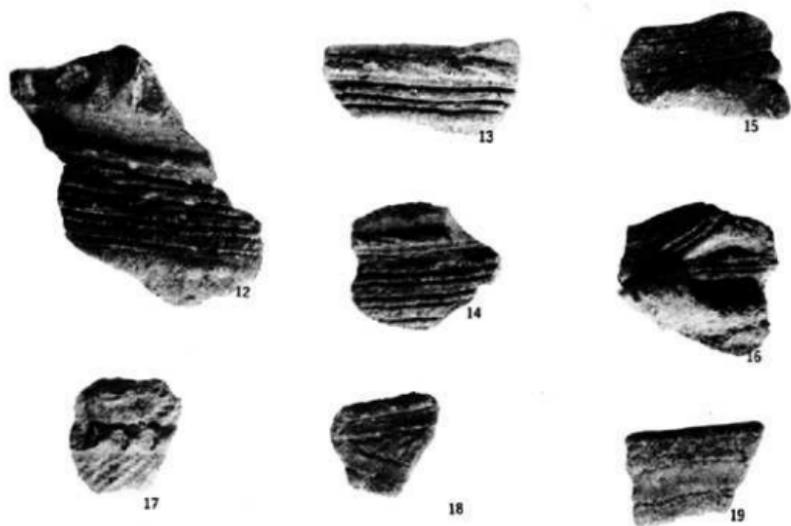


図版62

包含層出土第1群C類土器



包含層出土第1群d類土器



包含層出土第1群e類土器

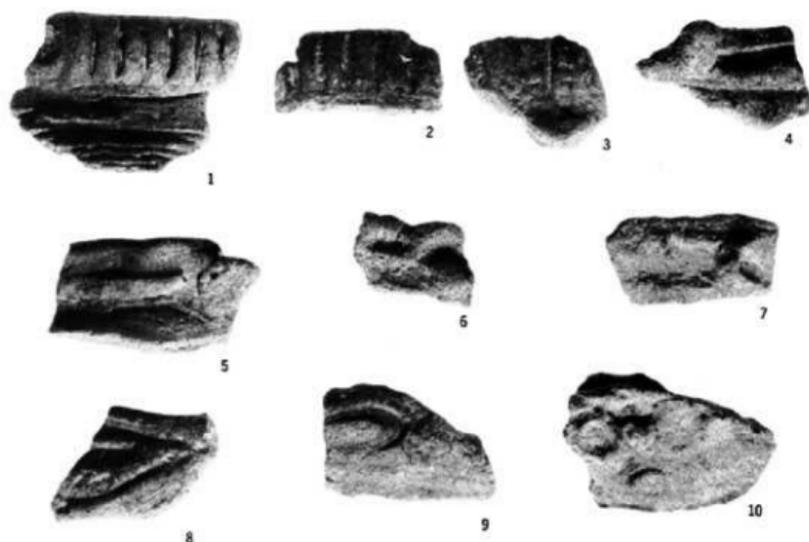
から縦方向に、やや幅広の棒状粘土紐を貼り付けており、2は地文が縦位方向になる絡条体圧痕を施し、3は粘土紐の上に半載竹管による爪形がみられる。8は曲線的に施している。文様は口唇から口縁にかけ主体的に描出されている。色調は1～3は暗茶褐色を呈しており、4～10は暗褐色となっている。

#### 1g類土器（図版65-1～9）

1d類と同様に半載竹管による沈線で施しているが、本類は重円形文と平行線との組合せによるものである。口縁から頸部にかけて文様が描出され、横位方向に単位文様が構成されている。2は数条の平行沈線の中に渦巻状に描かれ、1は平行沈線と縦位の沈線によって区画されており、1・2は同一の破片である。4は頸部付近の破片で、半円形状になって上・下の文様帯を区画している。3・5は重円形文として描出されている。6～8は、重円形文から派生している平行な沈線が施されている。胎土には多量の砂粒子が含まれ、7には繊維が含まれている。

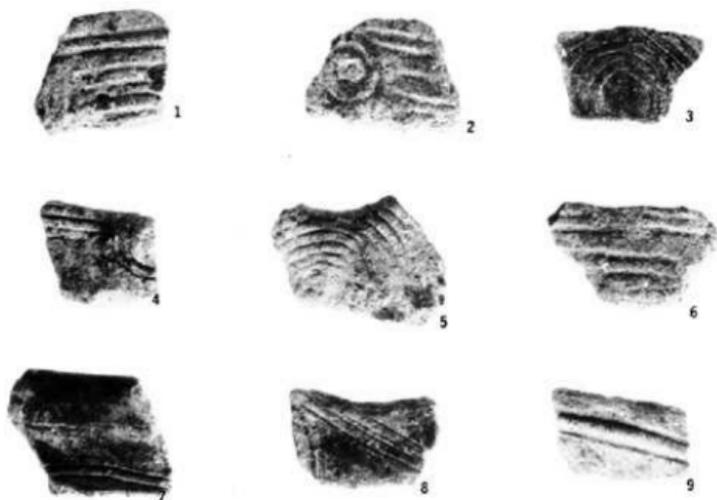
#### 1h類土器（図版57-7 図版65-10～20）

口唇部から頸部にかけて粘土紐貼り付けによる隆帯を施し、楕円形・方形状に横位方向に区画している。粘土紐の上面に縄文の圧痕を施している。器形は口縁部がやや外反して、頸部付近が屈曲し胴下半部まで直立する深鉢形を呈する。地文を単節縄文や多

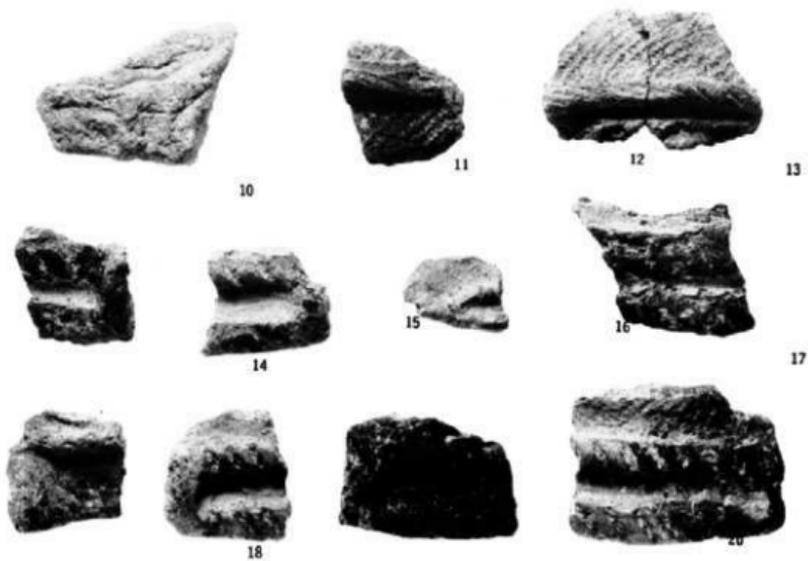


図版64

包含層出土第1群f類土器



包含層出土第1群g類土器



包含層出土第1群h類土器

縄文(10)を施し、頸部から胴部まで縄文帯となる。10~17までは口縁部に施しており、18・19では頸部に施している。20は、波状の粘土紐が貼付され、粘土紐を含めて器面全体に縄文が施されている。胎土には砂粒子が多く含まれ、とくに10~17までは多量の繊維が含まれる。色調は暗茶褐色あるいは黒褐色を示している。

#### 1 i 類 (図版66-1~6)

半截竹管およびへら状工具の先端を利用して、鋸歯状・綾杉状に底辺部付近まで、縦位方向に文様が構成されている。鋸歯状になるものは1~4で、綾杉状になるものには5・6がある。胎土には余り砂粒子が含まれず、若干繊維が含まれる。焼成は良い。

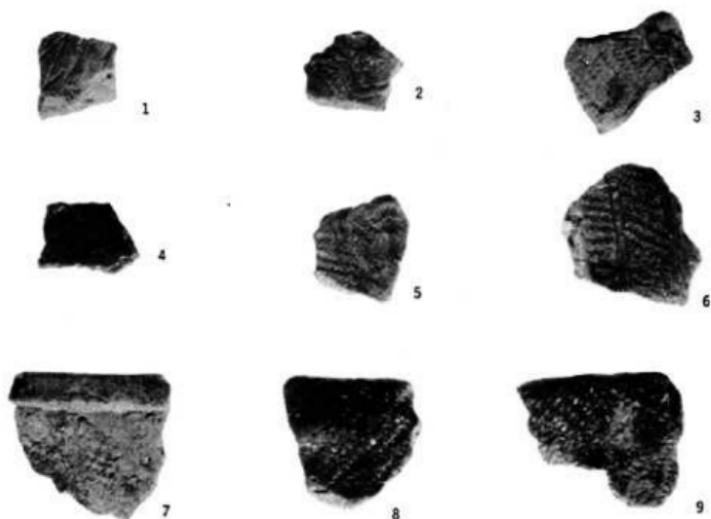
1 j 類 (図版55-18・19・31~33 図版57-6・11~13 図版59-12~16

図版60-9~11・23・24・30・31 図版66-7・8)

器面全体に縄文を施すグループである。図版66-7・8は口縁部の破片で、図版66-7は折り返し口縁である。両者とも口縁部が厚く丸味をもちやや外反している。その他はすべて胴部破片で、黒褐色を呈し多量の繊維が含まれている。

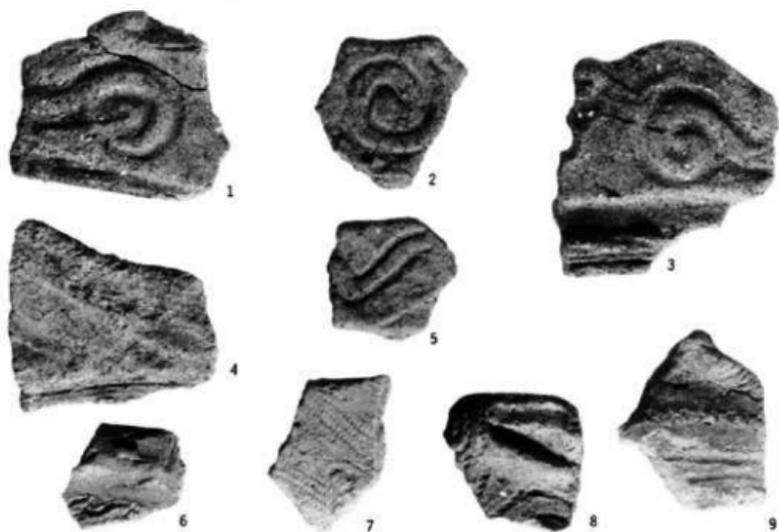
#### 第2群土器 (図版67)

縄文時代前半に位置づけられ、半截竹管・棒状工具などによって施された渦巻状の文様

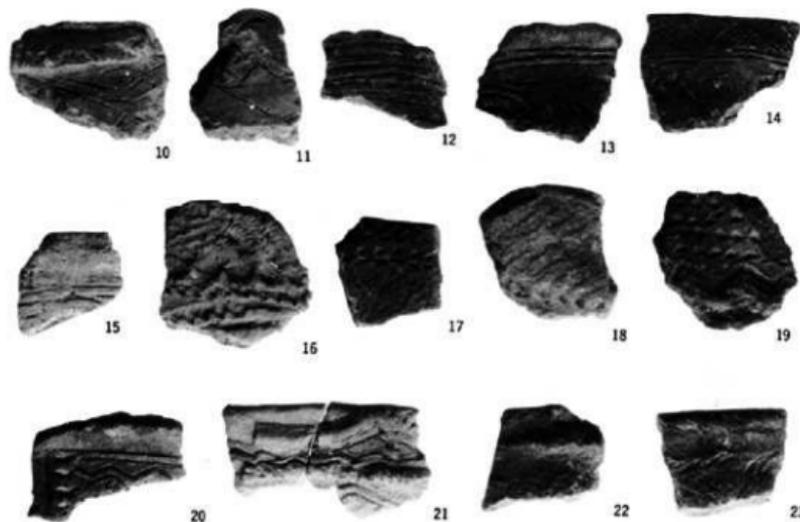


図版66

包含層出土第1群 i・j 類土器



包含層出土第2群 a・b類土器



包含層出土第2群 c類土器

や三角形の陰刻あるいは半截竹管による爪形がみられ、口縁部文様が主体となっている。胎土には多くの石英粒や砂粒子が含まれる。

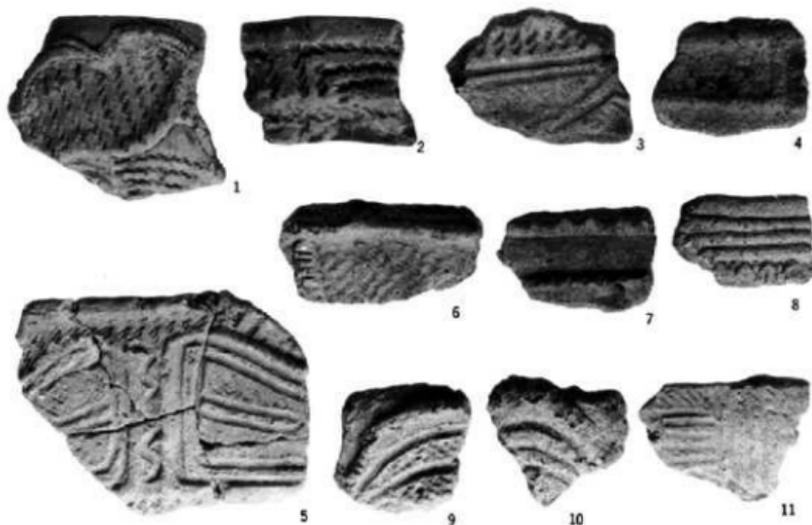
### 2 a 類土器 (図版67-1~5)

器形は、口縁が波状になり外反する深鉢形土器である。1~5はいずれも口縁部の破片である。1~3は口縁部に渦巻状文様が描出され、横位方向に流れるようにみられる。4・5は1~3でみられる渦巻状の文様から派生して、4では曲線的に、5では波状となっている。1・3・4では、頸部に平行な沈線がみられ、とくに3では粘土紐を貼付しさらに沈線を施し、口縁部文様帯と体部文様帯が明確に区分されている。胎土には多量の石英粒・砂粒子が含まれ、焼成も堅い土器である。色調は明褐色を呈する。

### 2 b 類土器 (図版55-22~26 図版67-6~9)

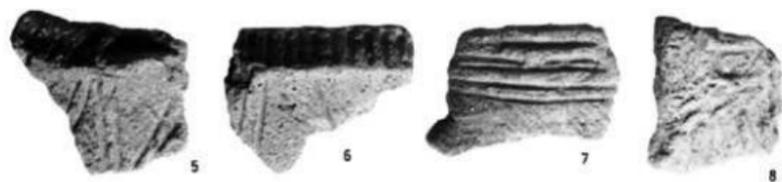
半截竹管による結節沈線を施すものと、摺糸圧痕・縄文による綾絡を一括した。結節沈線になるものは図版55-22~26で、口唇部が外反し口唇直下から平行に2条の沈線の上に爪形状の結節沈線が施されている。半円形状に摺糸圧痕を施すものは図版67-8で、平行になるものに図版67-9がある。横位に施される縄文の綾絡文は図版67-6で、斜状方向になるものに図版67-7がある。胎土には石英・砂粒が含まれ、色調は暗黄褐色を示す。

### 2 c 類土器 (図版67-10~23)

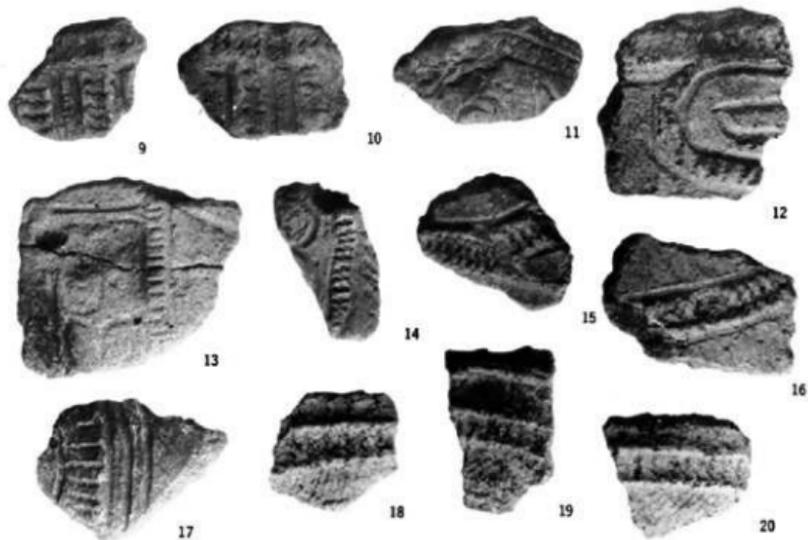


図版68

包含層出土第3群 a 類土器



包含層出土第3群b類土器



包含層出土第3群c類土器

器形はいずれも、口縁部がやや外反し頸部も若干屈曲して、胴上半部から下半部にかけて直立する深鉢形の土器である。胎土は、砂粒・石英粒が多量に混り、焼成も良く堅い土器である。半截竹管による平行・山形・鋸歯状の沈線を施すものは10～15・22・23で、14は口唇部付近に、10～13は頸部にそれぞれ描出されている。17～19は半截竹管による連続的な爪形文が施され、20・21は沈線や粘土紐が貼付された区画内に鋸歯状の沈線と陰刻がみられる。16は、2本の沈線の両側に連続する陰刻が施されている。

### 第3群土器（図版68・69）

縄文時代中期前半に位置付けられ、地文を縄文として、沈線や隆線によって楕円・円形・直線文などの区画が描出され、器面全体に文様がみられる。

#### 3 a 類土器（図版56—3～5 図版57—17 図版58—20・21 図版59—5 図版68—1～11）

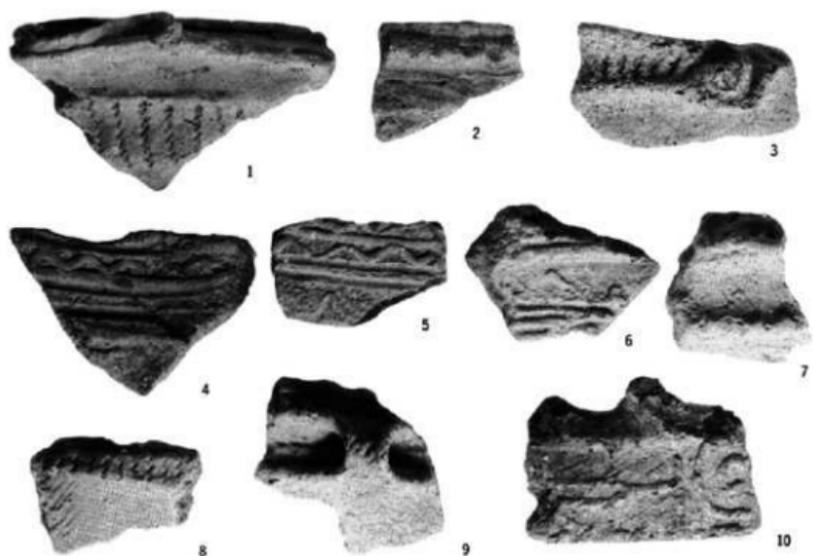
半截竹管による沈線によって文様が区画され、粘土紐の貼付や燃糸の圧痕が施されて文様構成の一要素として単位文様になるものもある。器形は波状口縁や平縁になる深鉢形土器や浅鉢形土器などがあり、浅鉢形土器は図版56—3・4・図版58—20・21・図版59—5であり燃糸圧痕が口縁部に曲線的に施されている。他は深鉢形を呈する。燃糸圧痕が沈線で区画された外側に施されるものは図版56—5・図版68—3・5で、図版68—5は沈線で方形に区画され、鋸歯状の沈線が縦に施される。図版68—1・2は曲線・方形に燃糸圧痕が隆線で区画されている。図版68—4・6～11は直線・半円形・棒状に沈線で区画され描出されている。胎土は砂粒・石英粒が多く含まれ、焼成もよく堅い土器である。

#### 3 b 類土器（図版56—5 図版57—24・25 図版58—14～19 図版59—2・3・6・7・ 11 図版69—1～8）

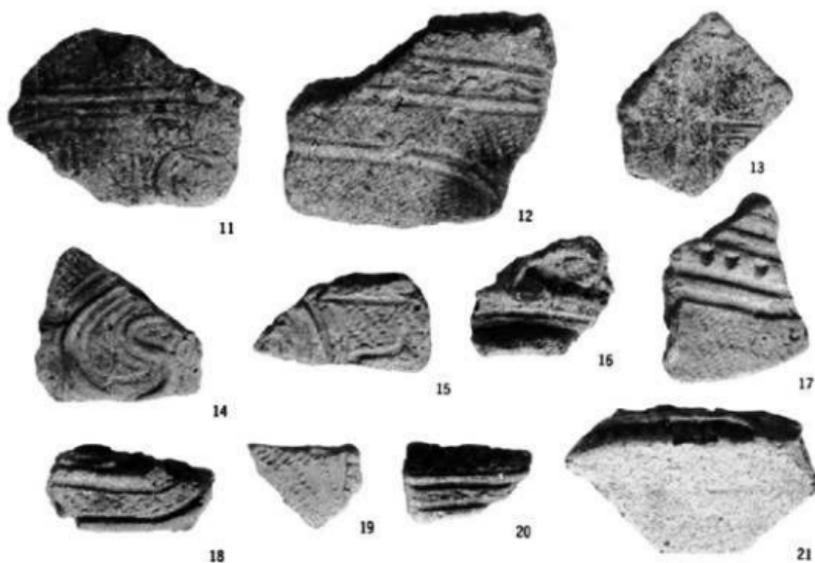
半截竹管の沈線によって、半円形・曲線・直線などの文様が描出され、器面全体に亘っている。器形は深鉢形土器・浅鉢形土器を呈している。胎土には砂粒・石英粒が多く混り、焼成もよく堅くなっている。図版57—24・図版69—1～4は頸部付近に半円形状の文様を描し、横位方向に連続して展開している。頸部から胴部にかけて縦位の沈線と曲線あるいは斜行線と組合されるものに図版56—5・図版58—16・17・図版59—6・図版69—5・6がある。図版59—3・図版69—4は胴部において方形の区画となる。その他は頸部にみられる平行な沈線によって口縁部文様と区画し、胴部で曲線的な文様を描出している。

#### 3 c 類土器（図版57—16・18・22 図版60—18・20 図版69—9～20）

粘土帯や紐を貼付して、その両側縁を沈線、さらにその上面に縄文圧痕を施し、縦位の直線や円形状や楕円形状の文様を描出している。縦位方向になるものは図版69—9・10・



包含層出土第4群a類土器



13・14で、円形・楕円形状になるものは図版57-16・18・22・図版69-11・12・15-20である。胎土には石英・砂粒子が多く含まれ、色調は褐色・明褐色となる。

#### 第4群土器 (図版70)

縄文時代中期中葉に位置付けられる。粘土紐による貼付や沈線によってS字状文や渦巻文が主体的に描出されている。

4a類土器 (図版56-6~10 図版57-15・19~21 図版58-1~5・8・9・22~25  
図版59-4・10・25 図版60-13~17・27 図版70-1~10)

粘土紐貼付により波状文や渦巻文が描出され、撚糸の圧痕が縦位方向に口縁部や頸部に中心的に施される。深鉢形土器・浅鉢形土器となる。

4b類土器 (図版57-23 図版59-17~20 図版60-1~8・21・22・28・29・32・33  
図版70-13・15・17)

沈線によって、渦巻文を主体に文様が描出され、粘土紐による波状の貼付がみられる。胴部文様は直線的な区画の中に渦巻文がみられる。

第5群土器 (図版56-10~12 図版58-6・7・10~12 図版59-8・9 図版59-  
21~24・26 図版60-5 図版70-11・12・14・16・18~21)

縄文時代中期中葉に位置付けられ、粘土紐を貼付し両側縁を沈線で調整するものと、沈線で渦巻文を主体とした文様構成をもつものがある。

#### 第6群土器 (図版60-19)

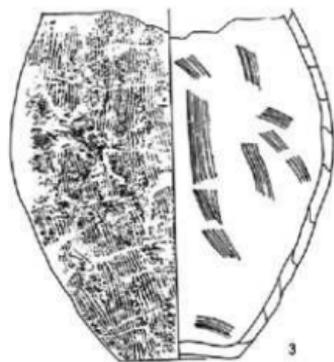
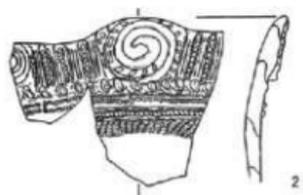
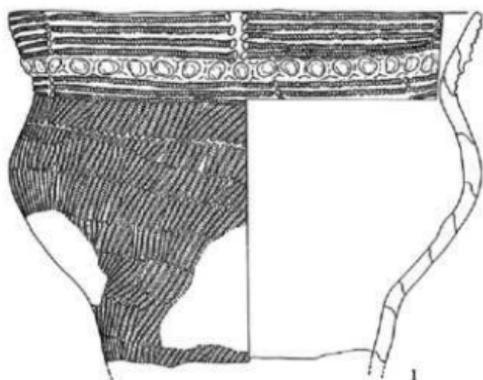
弥生時代後期の土器片で、器形は壺形土器になり、器面全体にLRの附加縄文を斜状方向より施している。

### 2) 完形土器 (第15図 図版71)

第1群土器に共通する (第15図1・2 図版71-01・02)

1e類・1g類と施文方法が共通し、絡条体の圧痕や渦巻文などが施されている。

(第15図1 図版71-01) 器形は、口縁部が外反し胴上半部の胴上半分の脹らみが最大となり、下半部はほぼ直立するキャリパー形の深鉢形土器である。口径32cm・現存高24cm・胴部最大径32cm・器壁厚1.0~1.2cmである。文様構成は、口縁部と頸部には絡条体による圧痕が施され、頸部付近には指頭による浮文がみられる。頸部付近から胴下半分までLRを地文とする多縄文が横方向に施される。胎土は、砂粒子が多量に含まれ、若干の繊維が混入されている。色調は、全体的には黒褐色を呈するが、部分的に褐色・暗褐色となっている。



第15图 完形・一括土器

(第15図2 図版71-02) 前者の土器と共伴する。口径20cm・現存高11cm・器壁厚約1.0~1.6cmを測る。器形は深鉢形土器を呈し、口縁部がやや外反する小波状口縁となり、全体が筒形状で胴下半がやや脹らみをもつ。文様構成は口縁部文様帯に集約し、波状口縁部に6単位で構成される渦巻文が描出される。渦巻文の間には粘土紐貼付による棒状の浮文が施され、その上面には半截竹管による細線がみられる。口縁部は縦方向の絡条体圧痕が施される。頸部には2条の絡条体圧痕が施され、上部には指頭痕による浮文がみられる。頸部下半はLRを地文とする多縄文を横位方向に施している。胎土は前者と同様である。

#### 第3群土器に共通する(図版71-08)

施文法は3c類と同様で、大形の深鉢形土器の一括土器で口唇部と胴中半以下が欠損している。地文を縄文としている。粘土帯の両側縁に沈線を施し、その上面には燃糸の圧痕がみられ、楕円形状の区画を呈し横位方向に文様が構成されている。口縁部には粘土紐が波状に貼付されており、胴部は楕円形で区画され間に沈線によって渦巻文が描出されている。胎土には砂粒・石英粒が多量に含まれ、色調は明褐色を呈している。

#### 第5群土器に共通する(第15図3 図版71-07)

器形は甕形を呈し、胴中半部に最大径があり底部は上げ底となっている。体部器面にLRの附加縄文を斜状方向に施している。現存高24cm・最大径22cm・底径8cm・器壁厚0.7~0.9cmを測る。胎土は砂粒子が含まれ、焼成が良く堅くしまっている。器面裏側はヘラ状工具で丁寧に調整している。

### 3) 土 偶 (図版71-03~06)

時期はいずれも縄文時代中期大木8b式に比定され、胴部のみ残存し、沈線によって文様が描出されている。03・04は渦巻文が描かれ、腹部が大きく脹らみ妊婦女性をかたどっている。05・06は背面で中央に縦に沈線が施され、06はさらに斜状に沈線が施される。

以上のように今回の調査では、縄文時代前期末葉から中期中葉までと弥生時代後期の土器が出土した。大別した土器片の時期は次の通りである。

第1群土器は、深鉢形土器を呈しキャリパー形や筒形状を示しており、主たる文様帯は口縁部に集約され、半截竹管によって文様が施文されており、縄文時代前期文木6式に比定される。第2群土器は第1群土器の文様が引き継がれているが、文様構成が口縁部と体部文様帯とに区分され、縄文時代中期大木7a式に比定される。第3群土器は縄文時代中期大木7b式に第4群土器は縄文時代中期大木8a式に、第5群土器は縄文時代中期大木8b式に比定される。第6群土器は弥生時代後期天王山式である。



01 (S K 33)



02 (S K 33)



03 (S K 41)



04 (S K 41)



05 (S X 35)



06 (30-27G)



07 (EU111)



08 (S K 71)

## 2 石 器

本遺跡からは平箱にして72箱分の石器類が出土した。II層下部から検出された4点のナイフ形石器・石刃を除けば、本遺跡で出土した縄文時代前期末葉～中期中葉までの土器群に伴うものであることは確実であるが、遺構内から出土した若干の資料以外、その時期を特定することは困難である。また、時期を特定できる遺構から出土した石器についても、ST8（前期末葉）から出土した2点の石錘が、他から区別できる程度で、SK33・55（ともに前期末葉）、SK72（中期中葉）の石鏃など比較できる資料の間で、有意差を認めることは困難であった。ただし、大量に出土した打製石斧I類、II類は折損品も含めて、前期末葉の遺構からは1点の出土もないという事実は尊重すべきものと考えられる。

縄文時代の石器の器種には、打製石器として、石鏃・石錐・石匙・打製石斧およびその類品・スクレーパー、磨製石器として磨製石斧、礫石器として、磨石・凹石・敲石・練刺礫・有溝砥石・石皿・石錘がある。この他に、打製石器の関連資料である剥片・石核や、剥片の縁辺に若干の加工を施した石器などが大量に出土しているが、諸般の都合により、今回の報告では割愛することとした。また、実測図による提示もできなかったが、この点について製作技術も含め別の機会にその責任を果たしたいと考えている。重ねてその非礼をお詫び申しあげる。

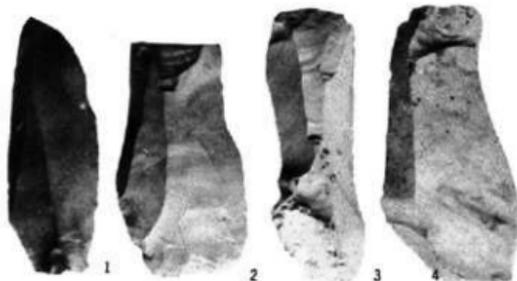
以下、各器種ごとにその概要を述べる。

### 1) ナイフ形石器・石刃（図版72 表-1）

表-1 ナイフ形石器他観察計測表

No	出土区	石 材	大きさ(mm)			重量(g)	ブラン ティング	器種名	図版
			長	幅	厚				
1	21-16	頁岩	87	31	9	27.5	右側全	ナイフ	72-1
2	16-25	頁岩	60	40	10	(42.5)	両側基	ナイフ	72-2
3	21-16	頁岩	92	31	11	37.5		石 刃	72-3
4	16-25	頁岩	96	44	7	35.4		石 刃	72-4

21-16区と16-25区から各1点ずつ検出された。21-16区はその隣接区も含めて地山を掘りさげたが、旧石器時代の包含層を認めることはできなかった。1は右側縁全体にブランティングが施され、左側に若干の刃こぼれがある。2は折損するがおそらく、14cm前後の大型のナイフ形石器で、基部両側に腹面からのブランティングが施されている。素材の打面は2点の石刃も含め、いずれも平坦である。



図版72

ナイフ形石器・石刃

## 2) 石 鎌・尖頭器 (第16・17図 図版73-1~27 表-2)

石鎌は25点出土した。これらは有茎のI類、無茎で脚のないIIa類、脚のつくIIb類に分けられ、その内訳はI類1点、IIa類1点、IIb類23点である。無茎で脚のつくIIb類が本遺跡の石鎌を代表するものと言えよう。IIb類の完形品12点について、その大きさをみると、長さは21~43mm、幅は12~33mmに分布し、それぞれ21~30、12~23mmの間に10点が入る。また重量は0.6~2.6gに分布し、1.4~2.1gに7点が集中する。側縁の形態は、折損品も含め両側縁が直線的なものも3点しかなく、ゆるいカーブを描くものが大半を占める。全長に対する抉り深度の割合をみると数点を除き10~30%の中に含まれる。第16図はそれぞれの外形を重ねたものであり、IIb類の石鎌は、そのかたちにおいて、画一性が高いものと判断できる。図版73-9・24は、前期末葉のSK33・55から出土し、19~23は中期中葉のST70、SK71・72からの出土であるが、これらの間に有意差は認められず、前期末葉から中期中葉にかけての石鎌の形態的な変化はなかったものと思われる。I類は黒曜石、IIa類は玉髄質を用いており頁岩を多用するIIb類とは石材においても異質な印象を受ける。

図版73-26は尖った舌部をもつ尖頭器、27は柳葉形の尖頭器で、26の尖頭部は、表裏とも押圧剝離によって見事に調整されている。



第16図 II<sub>b</sub>類外形

### 観察・計測表 註

- 1 大きさ 長 幅は第17図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。また、厚は最大厚をとった。折損品については( )を付し、残存値を示した。単位はmmである。
- 2 抉り深度 無茎で抉入部をもつ石鎌について、第17図に示した方法で得られた数値に一を付して表わした。また有茎の石鎌については+を付して、その茎の長さを示した。単位はmmである。
- 3 最大端の位置 尖頭部にあるものをA、脚部にあるものをB、そして最下端にあるものをB'とした。
- 4 側縁 側縁の形態を直線的なa、基状を描くb、脚部でくの字状に曲がるc、の三種類に分けて示した。
- 5 折損部位 先端部をa、左の脚部をb、右の脚部をcで示した。また、尖頭部の基部をdとした。



第17図 石鎌模式図

表-2 石鎌・尖頭観察・計測表

No.	品名	材質	全長		最大幅		最大厚	重量	側縁	脚部	抉り深度	折損
			mm	mm	mm	mm						
1	SK33	頁岩	21	12	12	1.4	0.6	a	+	10	0	0
2	SK55	頁岩	23	13	13	1.5	0.7	a	+	12	0	0
3	SK71	頁岩	25	14	14	1.6	0.8	a	+	15	0	0
4	SK72	頁岩	27	15	15	1.7	0.9	a	+	18	0	0
5	SK73	頁岩	29	16	16	1.8	1.0	a	+	20	0	0
6	SK74	頁岩	31	17	17	1.9	1.1	a	+	22	0	0
7	SK75	頁岩	33	18	18	2.0	1.2	a	+	25	0	0
8	SK76	頁岩	35	19	19	2.1	1.3	a	+	28	0	0
9	SK77	頁岩	37	20	20	2.2	1.4	a	+	30	0	0
10	SK78	頁岩	39	21	21	2.3	1.5	a	+	32	0	0
11	SK79	頁岩	41	22	22	2.4	1.6	a	+	35	0	0
12	SK80	頁岩	43	23	23	2.5	1.7	a	+	38	0	0
13	SK81	頁岩	21	12	12	1.4	0.6	a	+	10	0	0
14	SK82	頁岩	22	13	13	1.5	0.7	a	+	11	0	0
15	SK83	頁岩	23	14	14	1.6	0.8	a	+	12	0	0
16	SK84	頁岩	24	15	15	1.7	0.9	a	+	13	0	0
17	SK85	頁岩	25	16	16	1.8	1.0	a	+	14	0	0
18	SK86	頁岩	26	17	17	1.9	1.1	a	+	15	0	0
19	SK87	頁岩	27	18	18	2.0	1.2	a	+	16	0	0
20	SK88	頁岩	28	19	19	2.1	1.3	a	+	17	0	0
21	SK89	頁岩	29	20	20	2.2	1.4	a	+	18	0	0
22	SK90	頁岩	30	21	21	2.3	1.5	a	+	19	0	0
23	SK91	頁岩	31	22	22	2.4	1.6	a	+	20	0	0
24	SK92	頁岩	32	23	23	2.5	1.7	a	+	21	0	0
25	SK93	頁岩	33	24	24	2.6	1.8	a	+	22	0	0

### 3) 石 錐 (第18図 図版73-28~49 表-3)

調整加工によって尖った刃部を作出した石器を石錐とした。22点の出土があり、その形態によって次のように分類できる。

- I類 細長い尖頭部をもつもの。これらは尖頭部の長さによってa (1cm未満)、b (1cm以上)に細分される。Ia類が2点、Ib類が6点出土している。
- II類 平面形が三角形の尖頭部をもつもの。尖頭部が片面加工のa、両面加工のb、全体的に両面加工となるcに細分でき、それぞれ3点、3点、1点の出土がある。
- III類 棒状を呈し、平面形からは尖頭部と基部との区別がつかないもの。先端部が片面加工のa、両面加工のbに細分できる。IIIa類1点、IIIb類3点の出土がある。
- IV類 平面形が有茎の石鏃に類似するもの。尖頭部先端に磨耗がみられ、また側面視が弧状を呈することから、石鏃との区別は容易である。2点の出土がある。

尖頭部断面形と上記の各形態との関連をみると、Ia・b類と三角形、菱形、IV類と凸レンズ状との対応が指摘できる。



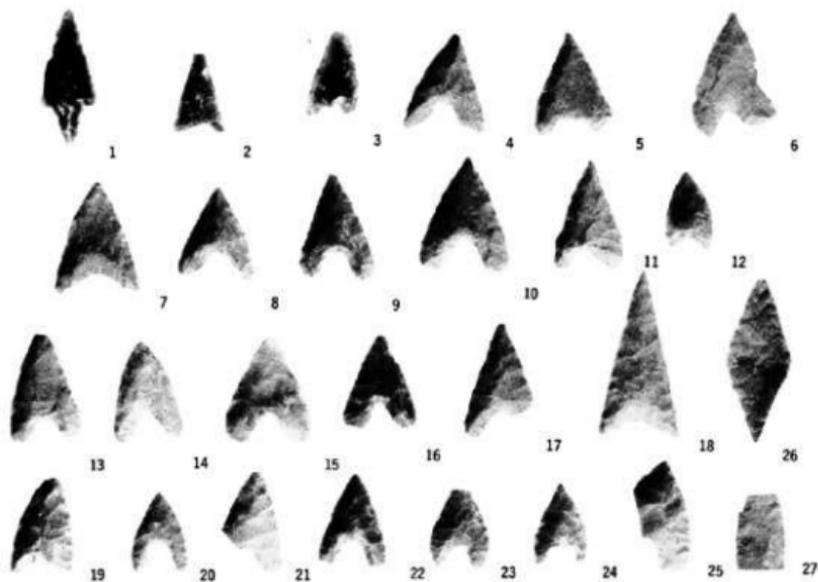
観察・計測表 註

- 1 大きさ 長・幅・厚は全長・最大幅・最大厚で、折損品には( )を行って残存値を示した。
- 2 尖頭部 第18図に示したように、長は尖頭部の長さ、幅は尖頭部の中間位置における幅、厚は先端部から5mmの位置で計測した。また断面形もこの位置で観察し、折損するものは折れ口で観察した。なおIb類の尖頭部の長さは、裏面の加工が始まる位置から計測した。IIIa類の尖頭部の長・幅は計測不能である。
- 3 尖頭部加工 先端部を下方に向け、素材の主要断面を下面にした場合の表面左側をa、右側をb、裏面の右側をc、左側をdとした。従ってaとd、bとcで縁辺を形成する。○印が加工のあるものである。

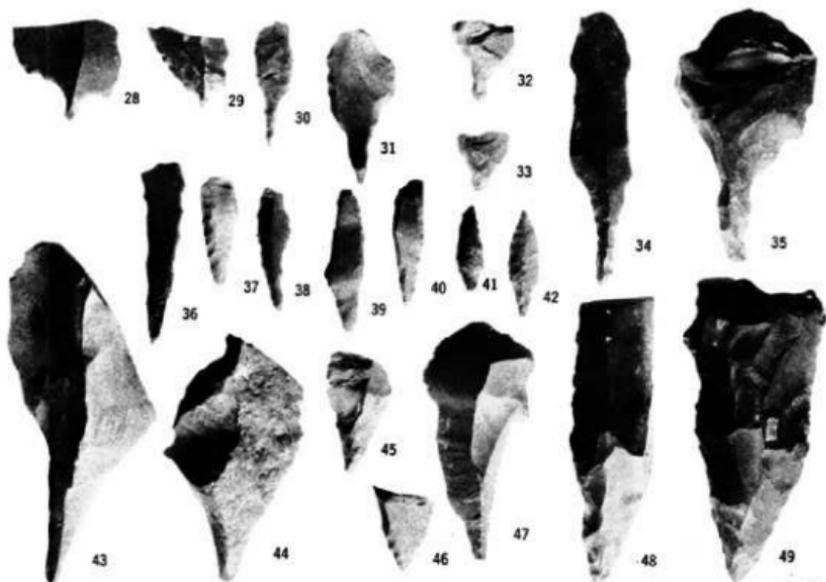
第18図 石錐模式図

表-3 石錐観察・計測表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	尖 頭 部			尖頭部加工				折 損	分類	図 版	
			長	幅	厚		長	幅	厚	断面形	a	b	c				d
1	18-21	頁岩	33	35	7	6.4	9mm	4mm	4mm	三角形	○	○	○			Ia	73-28
2	23-30	頁岩	24	23	9	4.2	4	3	5	三角形	○	○	○			Ia	73-29
3	S K72	頁岩	42	14	3	2.1	16	4	3	三角形	○	○	○			Ia	73-30
4	19-26	頁岩	50	23	5	6.3	16	6	5	三角形	○	○	○			Ia	73-31
5	E U111	頁岩	92	21	9	11.2	32	6	4	菱 形	○	○	○			Ia	73-34
6	X-0	頁岩	29	21	6	(2.9)	00	(5)	(4)	台 形	○	○	○	○	先端部	Ia	73-32
7	19-25	頁岩	20	18	3	(1.3)	(7)	(6)	(3)	三角形	○	○	○		先端部	Ia	73-33
8	27-16	頁岩	87	46	16	45.8	30	11	6	三角形	○	○	○		未成品	Ia	73-35
9	15-28	頁岩	42	29	11	9.2	22	9	6	三角形	○	○	○			IIa	73-45
10	29-20	頁岩	60	60	95	(45.5)	31	98	(5)	三角形	○	○	○		先端部	IIa	73-44
11	27-25	頁岩	47	46	33	11.5	51	11	6	三角形	○	○	○			IIa	73-43
12	25-43	頁岩	97	29	19	49.6	32	15	4	凸レンズ	○	○	○			IIa	73-48
13	S T 8	頁岩	60	35	12	(19.8)	13	(7)	(4)	三角形	○	○	○	○	先端部	IIa	73-47
14	27-19	頁岩	69	69	(6)	(2.7)	11	7	2	三角形	○	○	○		基 部	IIa	73-46
15	20-37	頁岩	35	44	30	123.9	32	16	6	凸レンズ	○	○	○			IIc	73-49
16	30-33	頁岩	61	14	7	5.4	—	—	4	台 形	○	○	○			IIIa	73-36
17	28-40	頁岩	36	12	5	2.4	11	6	4	菱 形	○	○	○			IIIa	73-37
18	S K82	頁岩	41	12	5	2.3	15	4	4	三角形	○	○	○			IIIa	73-38
19	25-17	頁岩	43	11	4	1.7	20	6	2	凸レンズ	○	○	○			IIIa	73-40
20	S K33	頁岩	47	13	5	4.0	18	7	3	凸レンズ	○	○	○			IIIa	73-39
21	27-19	頁岩	29	10	4	1.1	6	5	3	凸レンズ	○	○	○			IV	73-41
22	S K41	頁岩	36	11	4	1.1	9	4	2	凸レンズ	○	○	○			IV	73-42



石鏃・尖頭器



石鏃

#### 4) 石 匙 (第19図 図版74・75 表-4)

ノッチを入れてつまみを作出した石器で43点の出土がある。これはつまみと刃部との位置関係と刃部の形態から次のように分類できる。なお石材はすべて頁岩である。

I類 つまみを上に置いた場合、その側縁が刃部となる縦形のもの。28点出土。

- a 両側縁が末端で収斂し、尖がるもの。8点出土 (図版74-1~5)。
- b 両側縁が一方に扁つて収斂し一側縁が肩を張るもの。右側が直線的な  $b_1$ 、左側が直線的な  $b_2$  がある。5点出土 (図版74-6~8)。
- c 末端が弧状を描くもの。この部分に加工のある  $c_1$ 、加工のない  $c_2$  がある。5点出土 (図版74-9~11)。
- d 末端に素材の基部をもち肥厚するもの。2点出土 (図版74-12)。

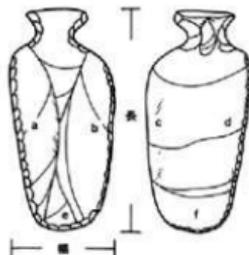
II類 縦形であるが、一側縁あるいは両側縁に加え、末端にも直線的な刃部をもつもの。4点出土 (図版75-1~4)。

III類 つまみを上に置いた場合、末端が刃部となる横形のもの。11点出土。

- a 刃部が弧状を描くもの。7点出土 (図版75-5~9)。
- b 刃部が直線的になるもの。4点出土 (図版75-10~13)。

つまみは、素材の基部側に作出するものが、各形態とも多数を占める。素材の形態を大きく変えるものが少ないことから、縦形のものでは縦長剥片を、横形のものでは横長剥片を好んで選択したものとみられる。縁辺の調整加工は、(図版74-9)や(図版75-1)を除けば全体的にラフなつくりで凹凸を帯びる例も多い。このような傾向は吹浦遺跡においても指摘されている(註1)。加工部位とその種類は表に示したとおりであり、刃部形成は各形態とも通常の剥離によるものが最も多いが、I a類に1点、I b類に2点、III a類、III b類に各1点、使用による刃こぼれとの区別が困難な微細な剥離によって形成されるものがある。またI a類、I c類、II類に各1点ずつ急角度で立ちあがるブランティング様の剥離によるものがある。

註1 柏倉亮吉 江坂輝弥他 (1955)『吹浦遺跡』 荘内古文化研究会



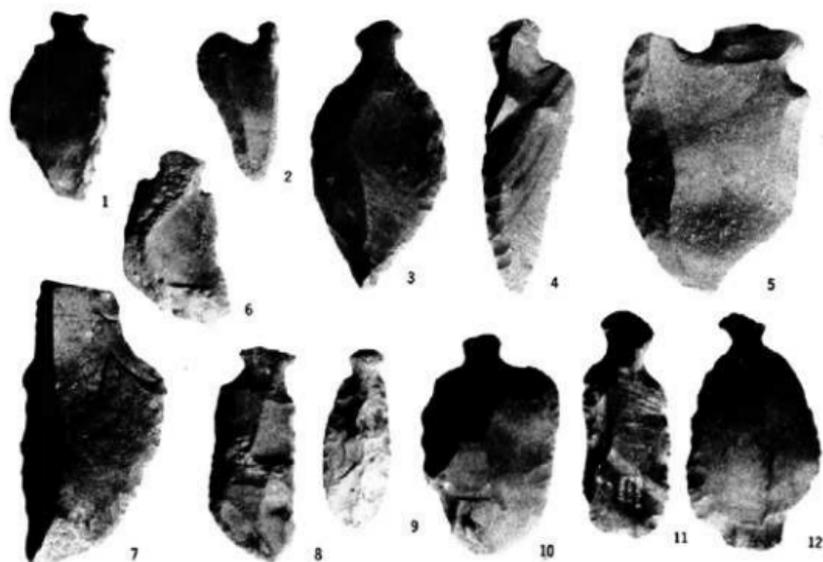
第19図 石匙模式図

#### 観察・計測表 註

- 1 加撃方向 つまみを上に置いた場合、表面からみた素材の加撃方向である。
- 2 末端形状 本文に記したとおり。なお一は折損を表わす。
- 3 加工部位と種類 a~fは左図に示した縁辺で、I a・b類の場合、e・fはなく、II類においては、つまみのノッチから最大幅の位置までを側縁とした。加工の種類は1:通常剥離 2:ブランティング様剥離 3:奥行2mm前後の微細な剥離 4:整形のための大きな剥離ないしは折れ。また、は縁辺の全長のうち1/6未満の加工。○は剥片の中央部に達する面的な加工を表わす。

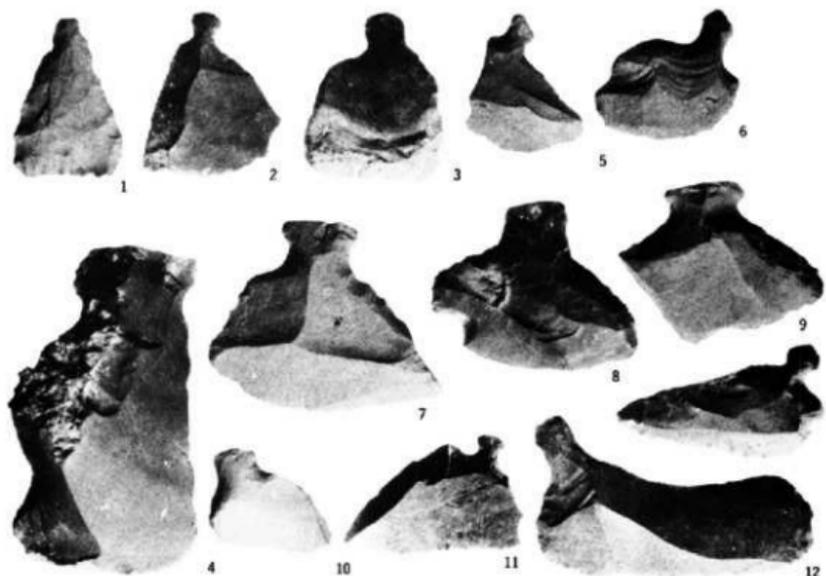
表一4 石匙觀察・計測表

No	出土区	大きさ(mm)			重量 (g)	加磨 方向	末端 形状	加工部位の種類					分類	図版	No	出土区	大きさ(mm)			重量 (g)	加磨 方向	末端 形状	加工部位の種類					分類	図版				
		長	幅	厚				a	b	c	d	e					f	長	幅				厚	a	b	c	d			e	f		
1	ST36	52	27	4	5.4	左上	a	3						I <sub>a</sub>	74-2	23	20-17	58	27	(7)	(6.0)	上	-								I		
2	28-32	50	32	8	12.8	上	a	3	1					I <sub>a</sub>			24	15-16	42	(5)	(7)	(4.7)	上	-	1	1	1	1			I		
3	22-30	62	31	9	17.8	上	a	2	2					I <sub>a</sub>	74-1	25	17-29	96	20	(8)	(11.1)	上	-	3		3	3'				I		
4	15-29	90	46	12	39.8	右上	a	1	1	3	1			I <sub>a</sub>	74-3	26	18-26	28	(2)	(6)	(3.6)	上	-	1	1	1					I		
5	17-26	60	41	12	27.3	右	a	1	1	1				I <sub>a</sub>			27	SX15	66	33	(8)	(10.6)	上	-	3						I		
6	16-29	90	61	9	54.0	上	a	1	3					I <sub>a</sub>	74-5	28	22-33	50	(9)	(17.0)	上	-	1	4	4						I		
7	SX72	93	29	10	29.1	上	a	1			1			I <sub>a</sub>	74-4	29	19-29	70	26	7	13.5	左上	e	①	①	①	①	①	①	①	①	II	75-1
8	24-29	60	32	12	41.9	上	a	1	1	1				I <sub>a</sub>			30	20-32	56	45	9	25.3	右	e	1	1	4	2			II	75-3	
9	SX41	60	32	13	21.9	上	b <sub>1</sub>	3						I <sub>aa</sub>	74-6	31	17-37	80	61	19	126.6	上	e	1	1	1					II	75-4	
10	24-25	75	29	9	23.7	上	b <sub>1</sub>	1	1	1	1			I <sub>aa</sub>	74-8	32	20-21	54	49	6	14.2	左上	e	1	4	4	1				II	75-2	
11	15-21	79	41	14	42.2	右上	b <sub>1</sub>	1	1	1	1			I <sub>aa</sub>			33	15-33	47	49	5	6.6	左上	e <sub>1</sub>	4	3'	3'	1			III	75-5	
12	X-0	71	52	12	33.1	左上	b <sub>1</sub>	3						I <sub>aa</sub>			34	20-22	43	49	10	18.2	上	e <sub>1</sub>	1				1		III	75-6	
13	27-29	88	46	16	75.3	上	b <sub>1</sub>	1	1					I <sub>aa</sub>	74-7	35	22-32	62	79	11	46.8	上	e <sub>1</sub>	3	1	3	3	3	3	3	III	75-7	
14	29-24	62	25	8	11.8	右上	c <sub>1</sub>	①	①	①	①	①	①	I <sub>aa</sub>	74-9	36	27-32	56	73	13	44.6	上	e <sub>1</sub>	1	1	4	1	1	1	1	1	III	75-8
15	18-28	68	27	8	14.8	上	c <sub>2</sub>	3	1	3				I <sub>aa</sub>			37	X-0	53	64	18	39.9	左下	e <sub>1</sub>	3		3	3			III		
16	20-17	72	46	17	61.6	上	c <sub>1</sub>	2	1	4	4'			I <sub>aa</sub>	74-10	38	16-22	52	71	15	43.2	上	e <sub>1</sub>	1	1	1	1	1	1	1	III	75-9	
17	19-16	76	29	8	23.3	左	c <sub>2</sub>	1	1	3	3			I <sub>aa</sub>	74-11	39	17-30	62	73	15	55.5	左下	e <sub>1</sub>	4	4	4	4	4	4	4	III		
18	17-32	81	45	9	30.8	上	c <sub>2</sub>	1	1	3	3'			I <sub>aa</sub>			40	19-26	36	42	7	12.1	上	e	1	4	4	1	3	3	III	75-10	
19	16-29	66	29	7	16.9	下	d	1	1	1				I <sub>a</sub>			41	24-31	45	62	8	17.0	上	e	4	4	3				III	75-11	
20	17-29	81	49	10	29.9	下	d	1	3					I <sub>a</sub>	74-12	42	15-26	40	70	10	23.2	上	e	4	1	3	1	3	3	III	75-12		
21	20-25	59	23	(7)	(6.5)	上	-	3						I			43	18-18	55	59	13	34.6	右	e	1	1	1	1	1	1	III	75-13	
22	20-21	80	38	(8)	(10.0)	上	-	3	3'					I																			



図版74

石匙(1)



図版75

石匙(2)

5) 打製石斧およびその類品(第20図 図版76~79 表-5 グラフ1)

大型で厚手の剥片を素材として、両面加工によって石斧状に仕上げた石器で、同様な製作技術をもつが、平面形や刃部の形態から石斧とは呼べない一群の石器、そして未成品等の関連資料を含めると145点にのぼり、本遺跡の石器のなかでは最も出土量が多い。また、ST10の床面や、SK72の覆土、それに捨て場と考えられるSX35からは、接合できる資料も出土し、特にST10からは、本体に14点の剥片が接合する好資料を得た(図版76)。これらの製作技術については、後の機会にゆずり、本稿では形態分類を中心に述べることにする。なお石材はすべて頁岩である。

I類 先端に両刃状の刃部を形成するもの。

a 平面形は短柵形で長幅指数が250以上の一類。14点出土(第20図1 図版77-1~13)。

b 平面形は短柵形で長幅指数が250以下の一類。6点出土(第20図2 図版77-14~19)。

II類 先端に片刃状の刃部を形成するもの。

a 平面形が短柵形を呈するもの。6点の出土(第20図3 図版78-1~6)。

b 平面形が楕形を呈するもの。2点出土(第20図4 図版78-7~8)。

III類 加工方法はI・II類に似るが、先端に斧状の刃部を持たない、打製石斧の類品。

- a 平面形は楕円形で長軸の一端が弧状を呈する。2点出土(第20図5 図版78-9)
- b<sub>1</sub> 平面形は木葉形を呈し、一端が尖るもの。2点出土(図版78-10・11)。
- b<sub>2</sub> 平面形は柳葉形を呈し、一端が尖るもの。1点出土(第20図6 図版78-12)。
- c<sub>1</sub> 平面形は短橢形を呈し、両刃状でゆるやかな弧を描く刃部をもち、II類に似るが刃部の幅が2cmに満たないもの。6点出土(第20図7 図版78-13~18)。
- c<sub>2</sub> c<sub>1</sub>に準ずるが、刃部が片刃状となるもの。3点出土(第20図7 図版78-19~21)。

#### IV類 折損後の刃部資料

- a 両刃状の一群。16点出土(図版77-19・20)。
- b 片刃状の一群。4点出土(図版78-22・23)。
- c 尖がるもの。1点出土(図版78-24)。
- d IIIc<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>の折損品(図版78-25・26)。

#### V類 折損後の基部資料

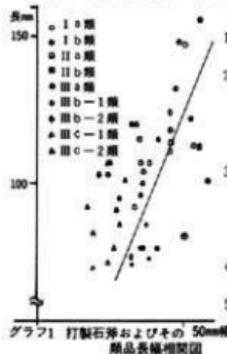
- a 断面形が凸レンズ状を呈し、I a・b類の基部とみられる一群。27点出土(図版79-6~12)。
- b 断面形がカマボコ状を呈し、II a類の基部とみられる一群。4点出土。
- c III類の基部とみられる一群。7点出土。

#### VI類 中間部資料を一括した。4点出土。

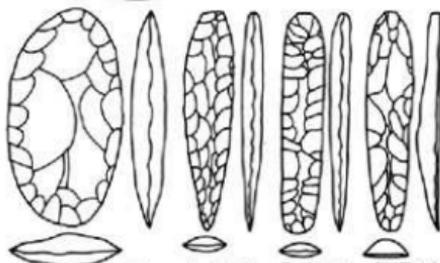
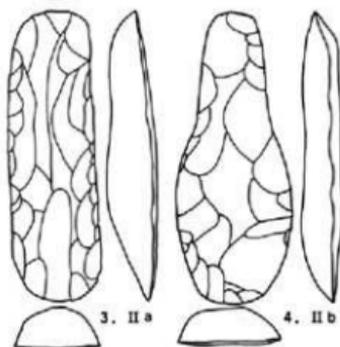
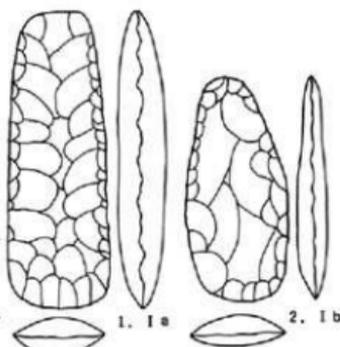
#### VII類 ほぼ完成しているが刃部未成とみられるもの。

- a I a・II類の未成品。11点出土(図版79-13~17)
- b I<sub>b</sub>類の未成品。1点出土。
- c III a類の未成品。2点出土。
- d III<sub>b</sub>・c類の未成品。5点出土。

#### VIII類 初期段階の未成品。19点出土。



- 観察・計測表 註
- 1 大きさ 長・幅・厚は全長、最大幅、最大厚を計測した。
  - 2 刃部形態 両は両刃、片は片刃。刃先が直線的なものは直、ややカーブするものは緩弧、弧状のものは弧、尖がるものを尖と表記した。
  - 3 基部形態 自然面を自、平坦な削離面を平、加工によるものを加とし、刃部と平行するものを直、傾くものを斜、弧状になるものを弧と表記した。
  - 4 断面形 Aは凸レンズ状、Bはカマボコ状、Cは台形状。
  - 5 加工部位と種類 石匙に準ず。



第20図 打製石斧およびその類品模式図





図版76

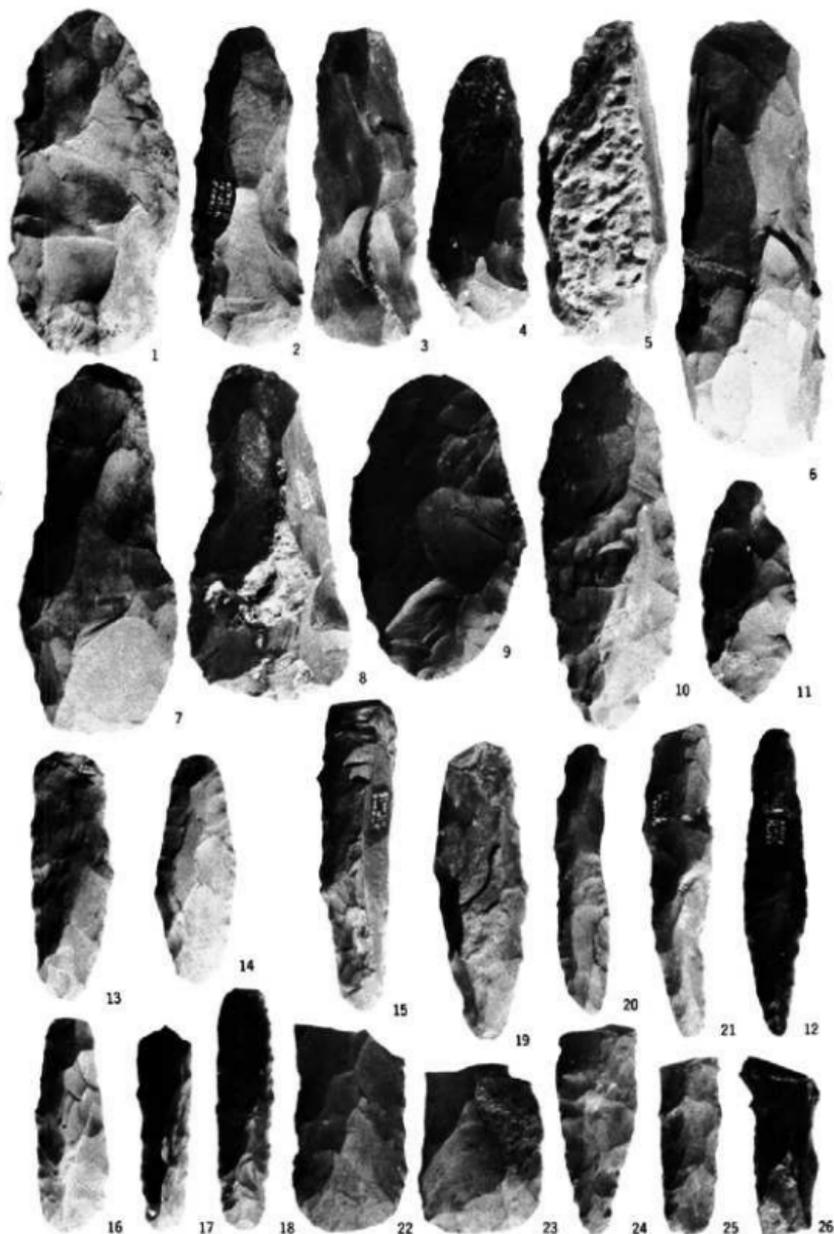
打製石斧およびその類品(1) ST10出土接合資料



図版77

打製石斧およびその類品(2)

I a 類 1~13  
 I b 類 14~19  
 IV a 類 20



図版78

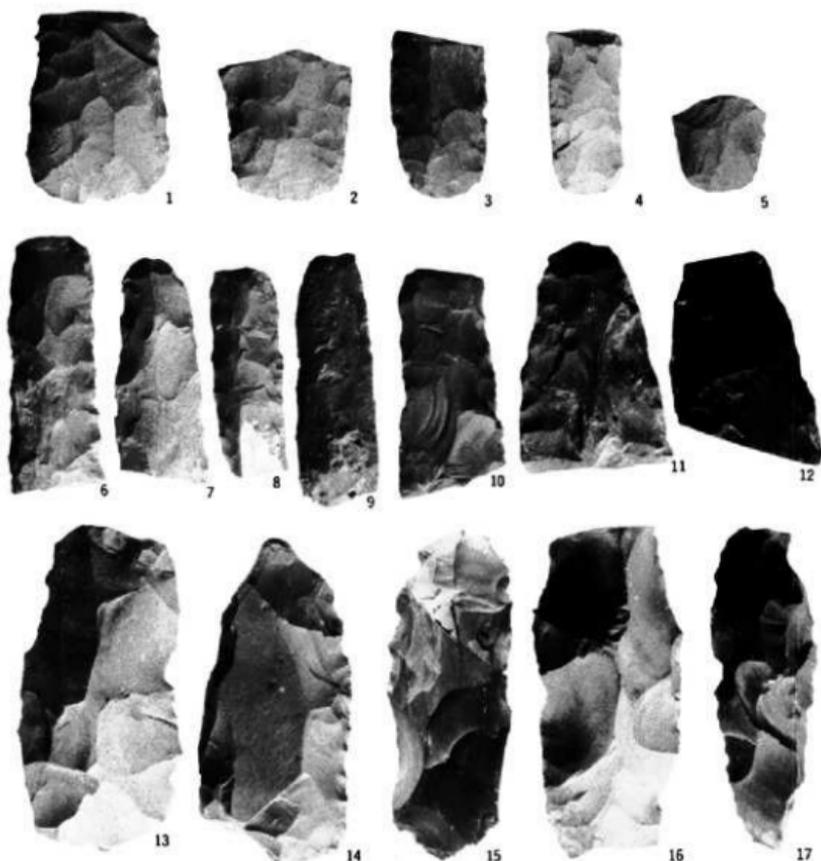
打製石斧およびその類品 (3)

II a 類 1~6 III b 類 10~11 IV b 類 22~23

II b 類 7~8 III c 類 12 IV c 類 24

III a 類 9 III c 類 13~18 IV d 類 25~26

III c 類 19~21



図版79 打製石斧およびその類品(4) IV類 1~5 V類 6~12 VI類 13~17

6) スクレーパー (第21図 図版80 表-6)

剥片の縁辺に連続する調整加工を施して刃部を作出する石器をスクレーパーとして扱う。原則として、素材となった剥片の主要剥離面から背面への片面加工によるが、両面加工となる小型の石器 (IV類) もこれに含めた。

50点の出土があり、調整加工の位置やその方法、そして刃部の形態から次のように分類できる。

I類 縦長剥片を素材として、その側辺に調整加工を施すもの。

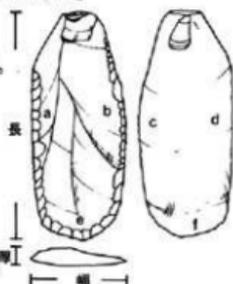
a 一側縁に加工を施して刃部を形成するもの。左側縁に加工のある a<sub>1</sub> が1点、右側

縁にあるa<sub>2</sub>が8点で、右側縁に刃部を形成するものが多い(図版80-1~3)。

- b 両側縁に加工を施すもの。8点の出土がある(図版80-4)。  
 c 両側縁に末端で取斂する加工を施すことにより先端を尖らしたもの。通常の加工によるC<sub>1</sub>が4点(図版80-5・7~9)、急角度の加工によるC<sub>2</sub>が2点(図版80-6・10)出土している。

II類 縦長剥片を素材として、主として、その末端に刃部を形成するもの。

- a 末端にのみ加工のあるもの。1点の出土(図版80-11)。  
 b 末端と一側縁に加工のあるもの。1点の出土(図版80-12)。  
 c 末端と両側縁に加工のあるもの。厚手の剥片を素材とし、末端から急角度で立ちあがる搔器状のC<sub>1</sub>が5点(図版80-13~15)、薄手の剥片を素材とし、鋭角の刃部を形成するもの。9点出土(図版80-16)。  
 d 基部が尖がり正三角形を呈するもの。1点出土(図版80-17)。  
 e 全周に調整加工が及ぶもの。1点出土(図版80-18)。



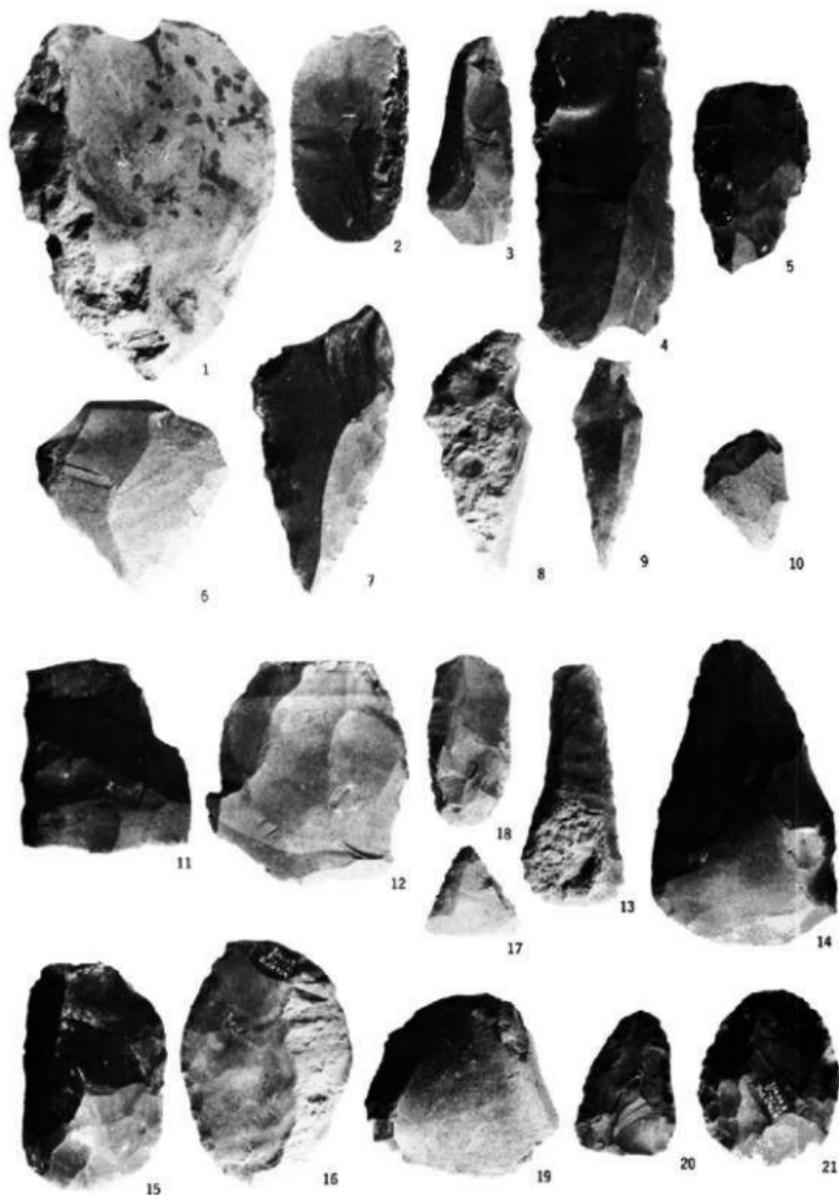
第21図 スクレーパー模式図

III類 横長剥片の末端に加工を施すもの。3点出土(図版80-19)。

IV類 両面加工で小型の一群。5点出土(図版80-19~20)。

表一六 スクレーパー観察・計測表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類							分類	図版		
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f					
1	S K78	頁岩	72	40	13	40.4	1										
2	17-28	頁岩	120	86	19	164.3	1										
3	S K83	頁岩	89	35	9	33.0	1	1'									
4	25-17	頁岩	70	29	11	21.0	1										
5	S T 8	頁岩	90	49	28	74.0	3	1									
6	S X35	頁岩	75	42	17	43.5	1										
7	19-28	頁岩	181	50	19	72.8	1'	1									
8	17-28	頁岩	92	34	17	48.3	1										
9	S T36	頁岩	86	48	16	50.6	1'	1	1'								
10	28-34	頁岩	86	48	13	43.5	1	1									
11	29-35	頁岩	114	47	18	120.4	1	1									
12	S T 8	頁岩	105	46	14	83.0	1	1									
13	30-27	頁岩	49	35	10	15.4	1		1								
14	19-18	頁岩	65	36	23	60.4	1	1									
15	S T 8	頁岩	47	32	7	4.6	1	1	3								
16	29-20①	頁岩	84	48	16	53.7	1	1									
17	31-33	頁岩	49	28	11	17.8	1	1									
18	29-32②	頁岩	64	39	17	42.8	①	①									
19	X-0	頁岩	99	47	17	69.5	1	1									
20	S X35	頁岩	84	39	10	26.5	1'	1'									
21	21-26	頁岩	74	24	10	10.1	1	1'									
22	30-31	頁岩	64	65	17	64.1	2	1									
23	22-27	頁岩	43	29	5	7.8	2	1									
24	28-33	頁岩	64	56	20	76.3				1							
25	20-24	頁岩	75	63	12	64.8	1		1								



7) 磨製石斧 (図版81 表-17)

13点の出土があるが、基部から刃先まで残る資料は3点と少なく、それらもまた刃先に破損がみられる。これらは、側辺の面取りの有無や最大厚が完形品ではほぼ中央にあることや、側辺の広がりなどから推定できる大きさから次のように分類できる。

I類 側辺の面取りがなく、横断面が楕円形に近いもの。

a 大型のもの (図版81-8)。推定長17~18cm。

b 中型のもの (図版81-1)。12cm。

II類 側辺に面取りがあり、横断面が台形に近いもの。

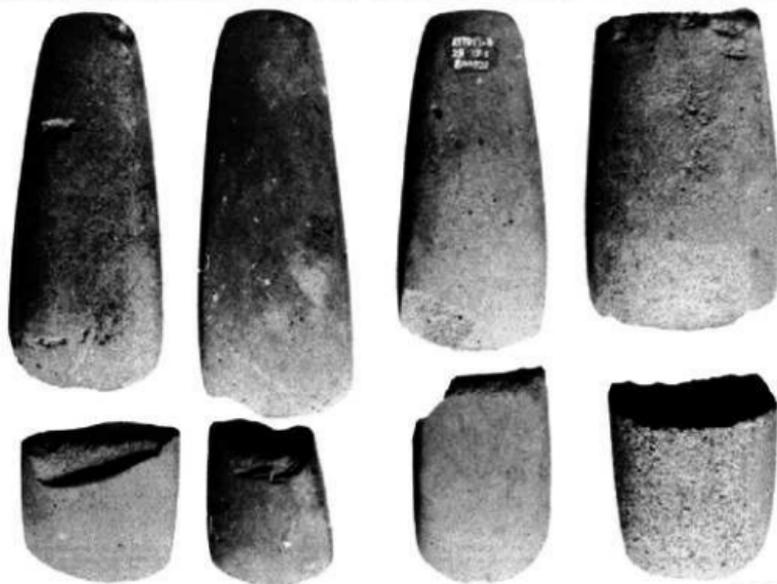
a 大型のもの (図版81-4)。推定長17~18cm。

b 中型のもの (図版81-2・3・5・7)。推定長11~13cm。

c 小型のもの (図版81-6)。推定 8cm。

表-7 磨製石斧観察・計測表

NO	出土区	石 種	大きさ (mm)			刃部形態	両 刃	残存部位	分類	図 版
			高	幅	厚					
1	28-16	花崗岩	99	55	54	166.0	両 刃	刃 部	I a	80-8
2	29-33	石炭層山砂	82	50	30	133.1	—	基 部	I a	80-1
3	19-21	石炭層山砂	122	50	31	262.8	両 刃	全 形	I a	80-4
4	17-19	石炭層山砂	114	50	27	122.6	両 刃	有 刃 部	II a	80-2
5	25-23	石炭層山砂	114	50	25	258.1	両 刃	有 刃 部	II a	80-3
6	28-32	石炭層山砂	113	49	28	220.3	両 刃	有 刃 部	II a	80-7
7	25-17	凝 灰 岩	135	52	30	347.7	—	有 基 部	II a	80-5
8	5-X32	凝 灰 岩	123	46	22	124.4	両 刃	有 刃 部	II a	80-9
9	5-X3	石炭層山砂	154	53	25	199.0	両 刃	有 刃 部	II a	80-5
10	25-14	凝 灰 岩	92	51	25	116.9	—	有 基 部	II a	
11	5-X72	石炭層山砂	78	47	22	140.3	—	有 基 部	II a	
12	XO	石炭層山砂	86	50	20	115.2	—	有 基 部	II a	
13	29-17	凝 灰 岩	157	43	21	155.9	両 刃	有 刃 部	II a	80-6



図版81

## 8) 磨石 (第22図 図版82~83 表-8)

河原石に磨痕のみられる石器を磨石とした。ここでは、磨痕を有する礫のうち、凹みや敲打痕、線刻、溝、打欠きをもつもの、さらに大型で扁平なものは別項を設けて取り扱うことにし、磨痕だけを持つ石器に限定した。72点の出土がある。

これらは磨痕のみられる部位、種類によって次のように分類できる。

I類 扁平礫、あるいは円礫の一面に磨痕をもつ一群。

- a 原礫面に沿った浅い磨痕をもつもの。4点出土 (図版82-1・2)。
- b 磨り込みによって断ち切られたような、いわゆる面取りをもつもの。5点出土 (図版82-3)。なお側面に磨痕をもつ欠損品が1点ある (No70)。

II類 礫の表・裏面、もしくは表・側面の2ヶ所に磨痕をもつ一群。

- a 両面に浅い磨痕をもつもの。24点出土 (図版82-4~6)。
- b 一面が浅い磨面、他の一面が面取りになるもの。11点出土 (図版83-1)。
- c 両面とも面取りになるもの。8点出土 (図版83-2~4)。
- d 一面と一側面に浅い磨痕をもつもの。1点出土。

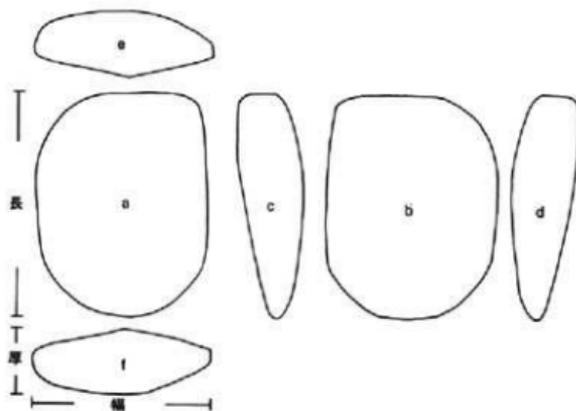
III類 礫の表・裏面と、上端、あるいは側面に磨痕をもつ一群。

- a 一面が浅く、他の一面が面取りになり、上端にも浅い磨痕をもつもの。1点出土。
- b 両面、一側が面取りになるもの。細長い棒状の $b_1$  (図版83-5)が2点、扁平な円礫の $b_2$ が6点 (図版83-6) がある。

IV類 表・裏・両側、あるいは上・下端等、四面に磨痕をもつもの。四面とも浅いa、一面が面取りになるb、四面とも面取りになるc (図版83-7・8) がある。

V類 表・裏・一側、上下端に浅い磨痕をもつものが一点出土している。

VI類 表裏両側上下と6面に磨痕をもつもの。



第22図 磨石模式図

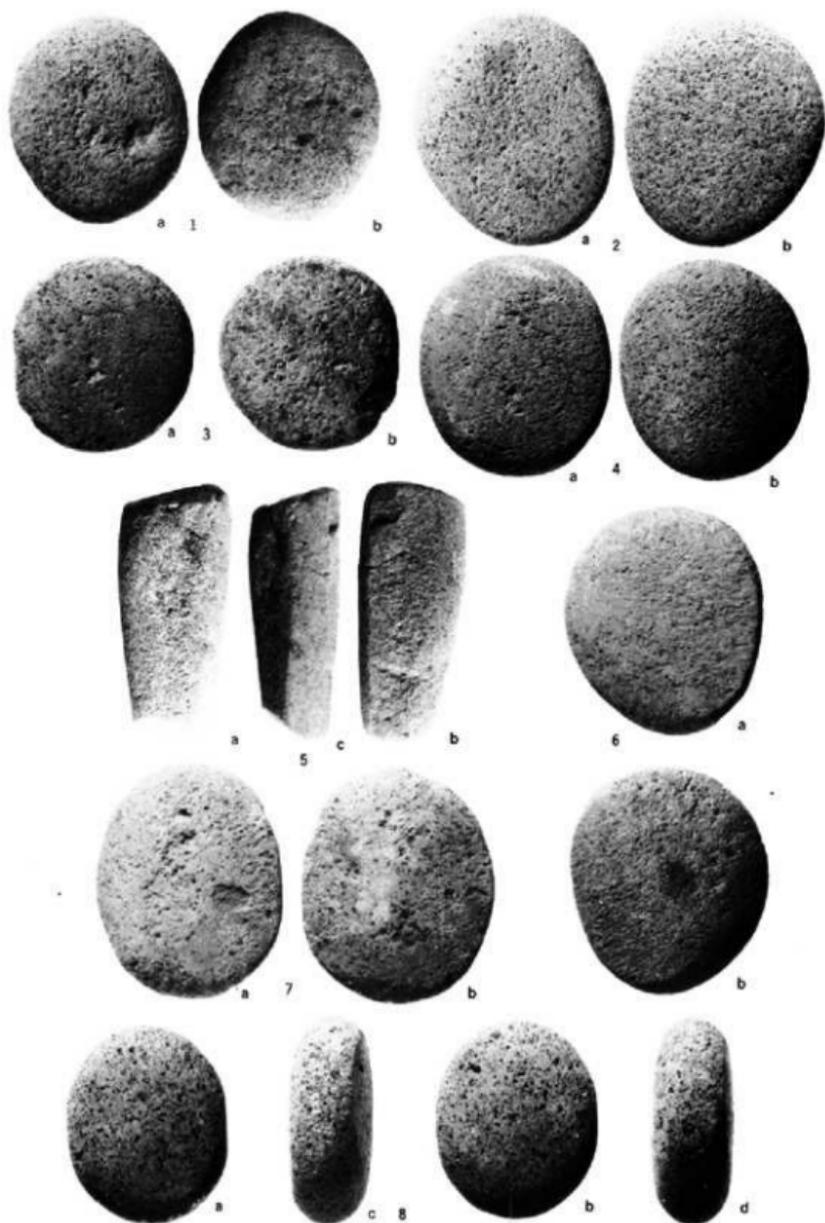
### 観察・計測表 註

1 石材 礫石器の石材を便宜的に次のように分類した。A: 緑色を帯び緻密で黒い鉱物を含む。B: 黄褐色で多孔質(凝灰岩か?)。C: 硬く若干の孔があり黒い鉱物を含む。D: 乳白色で緻密、石英を含む。E: 小礫を含む。F: 地色は赤紫で緻密、黒い鉱物を含む。G: 緑色で木目が粗い(泥岩か?)。H: 硬く石英を多量に含みキラキラする。I: 黄褐色の泥岩で軟かい。J: 砂岩。

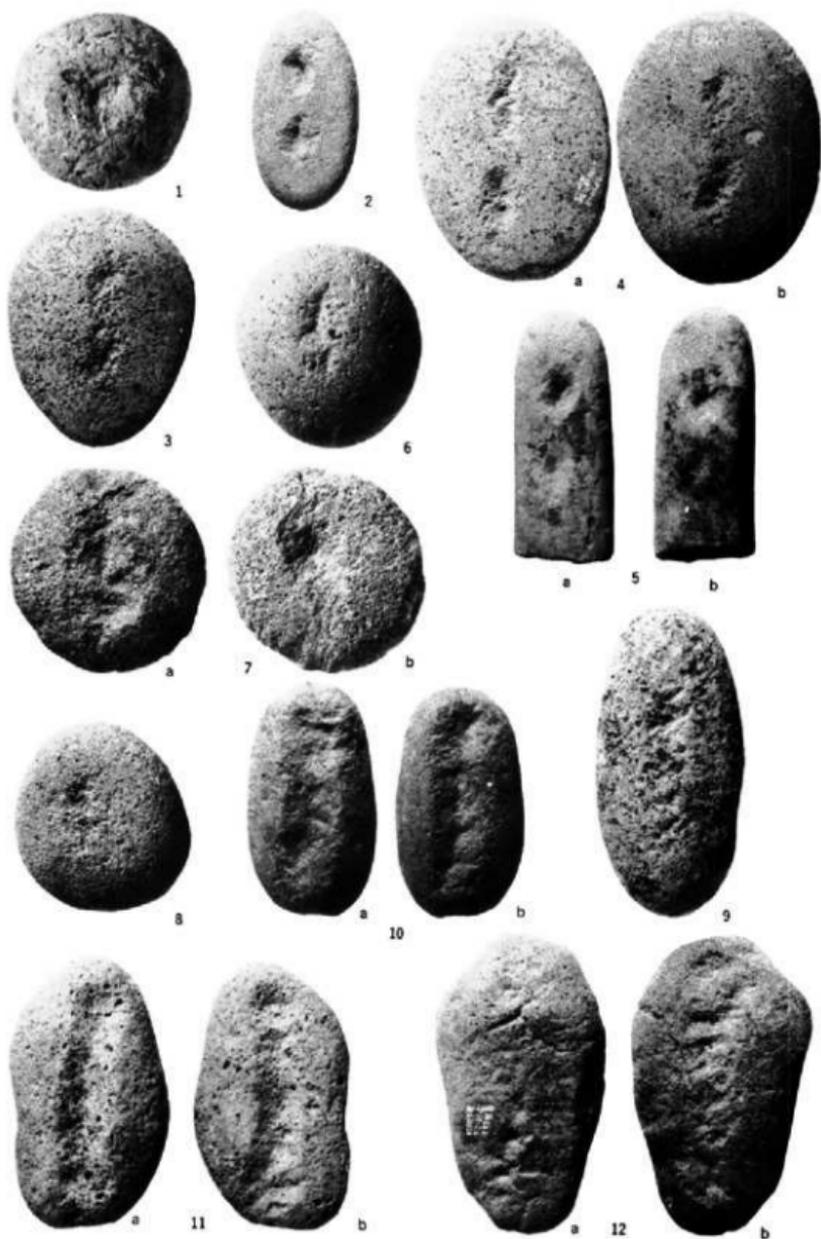
2 大きさ 第22図に示した位置で計測した。

3 磨痕の位置 礫を第22図に示した各面に分け、浅い磨痕をO、面取りを◎で表記した。









10) 敲 石・線刻礫・有溝礫石・石 皿 (図版83 表-10~13)

やや扁平な円礫の縁辺に敲打痕をもつ石器を敲石とした。なお、凹痕をもつものは凹石の項で扱った。11点の出土があり、うち4点は中間から破損する資料である。また、全資料とも打痕のみられる部位に剝離現象がみられ、損傷している。さらに、例外なく磨痕を合わせもっている。敲打痕の部位によって次のように分類できる。

I類 楕円形の礫の長軸両端と両側の4ヶ所に敲打痕をもつもの。1点出土(図版83-1)

II類 楕円形の礫の長軸両端の2ヶ所に敲打痕をもつもの。2点出土(図版83-2)。

III類 円形、もしくは楕円形の一端に敲打痕をもつもの。4点出土(図版83-3)。

IV類 破損資料で、4点あり、すべて一ヶ所に敲打痕をもつもの。

完形品6点の平均重量は647gで、磨石・凹石等より重くなっている。

礫面に幅1~3mm程度の浅い線状の溝が刻まれている石器を線刻礫とした。3点の出土があり、うち2点は自然礫の片面に、他の一点は、全体積の約半分を磨りとられたような磨石の、磨痕のある面と、その裏の二面に線

刻をもつ。図版83-4は、長軸方向に細い線刻を施した後、それと斜めに交わる方向からための線刻を施している。5は磨面の短軸方向に細い線刻を施し、その後、それに斜交する方向から、そして再び短軸方向に、3回の線刻がみられる。裏面はやや傾きを変えて、長軸方向から2回の線刻がある。他の1点は礫の長軸方向に数本の線刻をもつ。

有溝礫石は図版83-6~8の3点の出土がある。6・7は、礫の一面に幅10mm弱、深さ5mm弱の溝を一本もち、8は幅広の溝をもつ。この溝の内部に磨痕がみられる。

石皿は完形品1点、全体の $\frac{1}{4}$ 程度の資料1点の2点が出土している。図版9は擦面に凹面はないが、平坦に磨かれている。10は深さ12mmの凹面をもつ小型石皿で裏面に擦面は認められない。

表-10 敲石観察・計測表

NO	出土区	石種	大きさ(mm)			重量(g)	磨痕の位置										分類	図版			
			長	幅	厚		上	下	左	右	a	b	c	d	e	f			g	h	i
1	SX35	A	116	26	46	582.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I	85-1
2	19-15	C	127	181	46	459.3	○	○			○	○							II	85-2	
3	27-16	A	104	181	35	462.8	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	II		
4	18-22	C	106	85	44	589.8	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
5	29-37	C	90	86	62	576.8	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
6	20-25	C	117	84	61	840.3	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○		85-3	
7	XO	F	151	119	34	791.5	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
8	21-20	C	1090	1010	140	1028.0	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
9	S K12	F	181	181	141	4012.0	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
10	28-11	C	190	170	130	2865.0	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
11	S K20	A	152	135	130	1168.7	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			

表-11 線刻礫観察・計測表

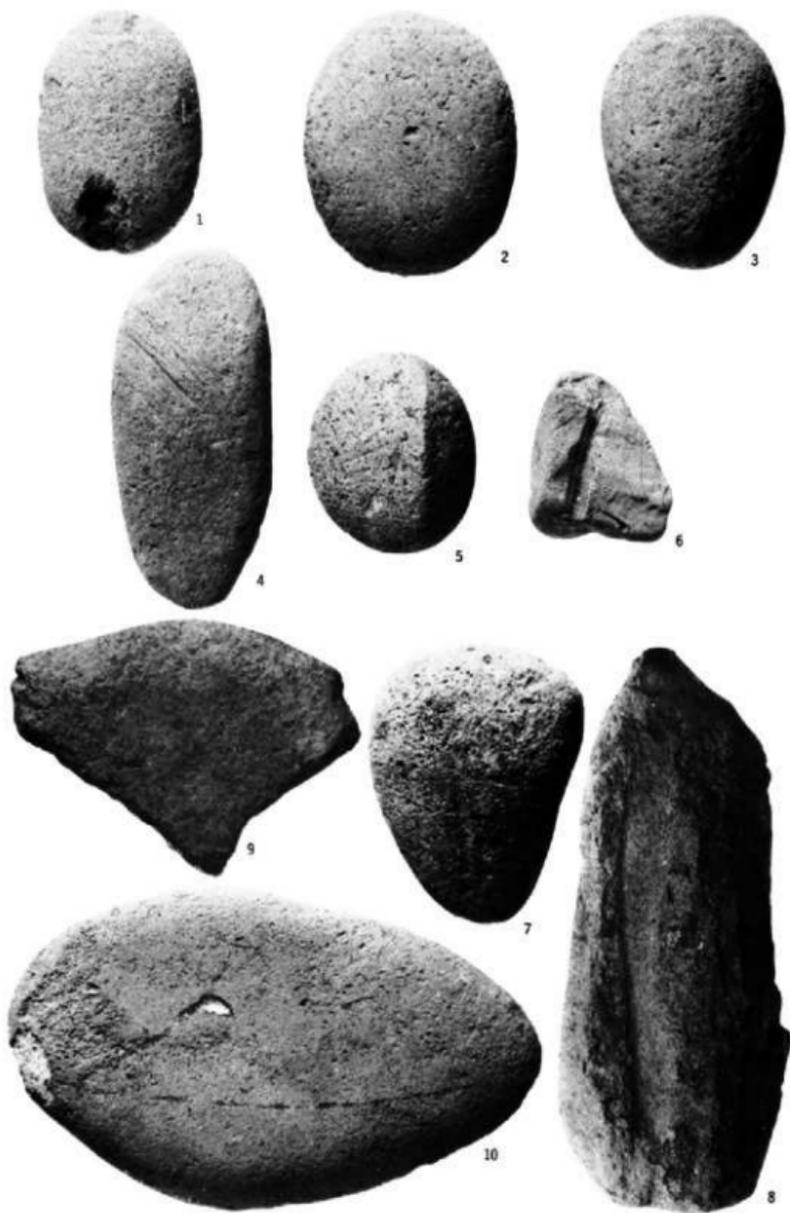
NO	出土区	石種	大きさ(mm)			重量(g)	磨痕の位置										分類	図版			
			長	幅	厚		a	b	a	b	c	d	e	f	g	h			i		
1	21-20	A	96	80	50	339.3	○	○	○											I	85-4
2	S K20	A	177	77	32	571.2	○													II	85-4
3	21-20	B	130	111	32	589.8	○													II	

表-12 有溝礫石観察・計測表

No	出土区	石種	大きさ(mm)			重量(g)	磨痕の位置		幅(mm)	厚(mm)	磨痕の位置	図版
			長	幅	厚		a	b				
1	15-26	J	263	112	47	1458.8	○	○	39	7	C	85-8
2	17-29	G	134	102	47	320.9	○		7	3	d	85-7
3	19-28	G	65	54	35	37.8	○		9	5	-	85-7

表-13 石皿観察・計測表

No	出土区	石種	大きさ(mm)			重量(g)	磨痕の位置		面	残存	図版
			長	幅	厚		a	b			
1	19-44	B	267	175	39	1458.2	○		12	光	85-10
2	17-26	C	169	125	49	1356.1	○		0	1/4	85-9



図版85

# 11) 石 錘 (第23図 図版86 表-14)

扁平な際、もしくは磨り減って扁平になった円礫の相対する両端から、打欠きによって挟り込みを入れた石器を石錘とした。29点の出土があり、打欠きの位置、重量から次のように分類できる。

A群 扁平礫の長軸の相対する両端から打欠きのあるもの。

- I類 重量が400g未満のもの。5点出土(図版84-1・4・5)。
- II類 重量が400g以上、600g未満。5点出土(図版84-2)。
- III類 重量が600g以上、800g未満。11点出土(図版84-7・8)。
- IV類 重量が800g以上、1000g未満。2点出土(図版84-3・6)。
- V類 重量が1000g以上。2点出土(図版84-9)。

B群 扁平礫の長軸と短軸のそれぞれ相対する2端に打欠きのあるもの。

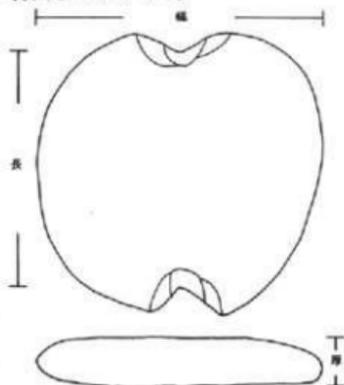
III類 重量が100g以上、800g未満。2点出土(図版84-11)

C群 扁平礫の長軸の相対する両端と、一側縁に打欠きのあるもの。

- I類 重量が400g未満のもの(図版84-10)。
- III類 重量が600g以上、800g未満。

### 観察・計測表 註

- 1 大きさ 第23図に示したように、長は、打欠きの最長部間の長さ、幅はそれに直行する位置での幅、厚は最大厚をとった。
- 2 打欠き それぞれの位置で、表面両面から打欠きのある場合を両、いずれか一面からの場合を片として区別して表記した。
- 3 磨痕の位置 表・裏・左・右は、それぞれ任意であるが、一面にのみ磨痕のある場合はその面を表面とした。○印は透い磨面、◎印は面取りを表わす。



第23図 石錘模式図

表-14 石錘観察・計測表

NO.	出土地	図印	大きさ(mm)		重量(g)	打欠きの位置				分類	図版	300	出土区	石種	大きさ(mm)		重量(g)	打欠きの位置	磨痕の位置	分類	図版						
			長	幅		上	下	左	右						表	裏						長	幅				
1	5K9b	D	85	48	25.8	両	両	○	○	A	I		14	10-26	E	126	126	37	981.7	両	片	○	○	A	II		
2	X-O	C	81	81	26.8	両	両	○	○	A	I		15	14-19 ①	A	101	101	37	719.3	両	片	○	○	A	II		
3	14-22 ①	C	91	51	26.7	両	両	○	○	A	I	第-1	16	20-18	B	124	119	36	718.7	両	両	○	○	A	II		
4	30-32	A	102	84	22.2	両	両	○	○	A	I	第-1	17	15-23	A	121	97	29	752.4	両	両	○	○	A	II		
5	5X35	C	114	89	27.3	両	両	○	○	A	I	第-1	18	16-19	B	127	124	34	732.2	両	両	○	○	A	II		
6	22-23	A	102	119	26	48.4	打	片	○	○	A	II	19	19-22	A	124	126	36	756.8	両	両	○	○	A	II		
7	19-21	A	117	83	31	48.4	両	両	○	○	A	II	20	15-17	A	119	116	35	772.8	両	両	○	○	A	II		
8	19-22	C	91	129	24	43.3	両	片	○	○	A	II	21	19-18	A	120	127	42	796.0	両	両	○	○	A	II		
9	11-19 ①	A	122	95	29	40.7	両	両	○	○	A	II	22	20-28	B	138	137	43	894.5	両	両	○	○	A	IV	第-6	
10	15-19 ①	D	100	100	35	32.5	両	両	○	○	A	II	23	17-19	A	140	138	33	848.6	両	両	○	○	A	IV	第-2	
11	15-20 ①	B	120	127	42	58.2	両	両	○	○	A	II	24	19-11 ①	C	201	138	42	1082.6	両	両	○	○	A	V		
12	14-22 ①	A	89	116	37	80.2	両	両	○	○	A	II	25	30-39	B	223	168	48	1083.2	両	両	○	○	A	V	第-9	
13	11-19 ①	A	111	126	37	67.7	両	両	○	○	A	II	26	25-19	A	145	139	37	965.9	両	両	片	○	○	B	III	
14	11-19 ①	A	111	126	37	67.7	両	両	○	○	A	II	27	S78	E	149	151	39	874.9	両	両	片	○	○	B	III	第-11
15	11-19 ①	A	111	126	37	67.7	両	両	○	○	A	II	28	S78	A	93	75	33	273.5	両	片	○	○	C	I	第-10	
16	11-19 ①	A	111	126	37	67.7	両	両	○	○	A	II	29	10-18	B	124	122	31	622.6	両	片	○	○	C	II		

グラフ2は、各群のI～V類の長幅関係を図にしたものである。I類は、やや縦長となり、II類～IV類は長幅関係1：1の線を中心に、ほぼ同じような分布を示す。またV類は飛びぬけて大きいことなどが理解できる。また、最大厚と、重量との関係をグラフ3でみると、厚さ20～30mmのものは200～500gの間に散漫に分布し、30～40mmのものは600～800gに集中することが知られ、I・II類においては厚さ20～30mmに、III・IV類では30～40mmの厚さをもつ扁平礫を好んで選択したことが窺える。また、29点中、23点の表・裏面に磨痕が観察されるが、これらが磨石からの転用なのか、あるいは手慣れた厚さになるまで磨り減らしたものであるかの判断はむずかしい。ただ、一般に磨痕だけをもつ磨石よりは、打欠きを入れる前の石鍾素材の方が、より大型であること、磨痕との切合い関係をみると例外なく打欠きの方が新しく、磨石と凹石との間でみられたような、反復使用が認められないという事実を指摘するに止めたい。

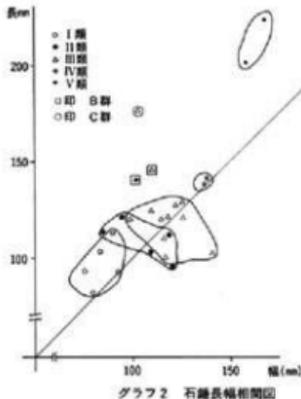
さて、石鍾の属性のなかで、最も重要であると考えられる重量について、他の遺跡の出土例と比較してみたい。なお、本遺跡の平均重量は675gである。

鶴岡市の岡山遺跡は標高69mの独立丘陵に立地し6次にわたる発掘調査により80点の石鍾が出土している。最小40g～最大420gまで分布し、200g前後のものが多数を占めるようである。伴出土器から縄文前期～中期中葉の所産とみられる(註1)。

秋田県男鹿市の大畑台遺跡は、標高40mの海蝕段丘に立地し、中期前葉～中葉の土器とともに8点の石鍾が出土している。重量は510～1120gに分布し、平均値は696gである(註2)。

石川県金沢市の古府遺跡は、標高10mの扇状地末端に立地し、中期中葉の土器とともに58点の石鍾が出土している。すべて350g以下で、100g前後に集中している(註3)。

以上のように、ほぼ同時期の所産であっても遺跡間の重量隔差は大きく、本石器が漁網鍾であるとすれば、対象となった河川の規模もその重量に少なからぬ影響を与えたものと解されよう。東興野Bの最上川、大畑台の日本海に対し、岡山・古府にはいずれも小河川しかない。

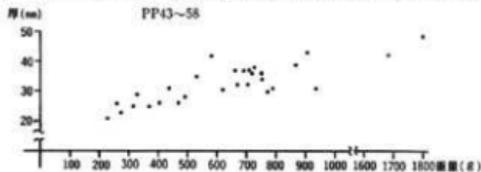


グラフ2 石鍾長幅相関図

のと解されよう。東興野Bの最上川、大畑台の日本海に対し、岡山・古府にはいずれも小河川しかない。

- 註1 佐藤雅宏(1972)「第IV章第4節 石器」『岡山遺跡調査報告』P65  
 名和達彦(1975)「第IV章第2節 B石器」『岡山遺跡第六次発掘調査報告書』P86  
 酒井忠一他(1975)『岡山遺跡第5次発掘調査概報』『庄内考古第12号』PP1～32  
 註2 小玉 洋(1979)「第III章出土遺物と出土遺物」『大畑台遺跡発掘調査報告書』  
 PP27～240

- 註3 宮本哲郎(1974)「IV遺物」『石 器』『金沢市古府遺跡一第4・5次調査報告』  
 PP43～58



グラフ3 石鍾・厚・重量相関図



1



2



3



4



5



6



7



8



10



11



9

## V まとめ

### 1 遺構について

住居跡は3ヶ所で5軒を検出した。縄文時代前期末葉大木6式期のST8・9、ST36と、縄文時代中期中葉の大木8a式期のST10・70である。またST70と切合うSX117、118も一部で周壁の立ち上がりを確認したが、住居跡との確証を得るには至らなかった。さらに、2ヶ所で柱穴の可能性のあるピット群を確認した。

前期末葉のST8・9・36に共通することとして、平面プランは不整の隅丸方形を呈しその一角に張り出しをもつこと、ピットは周壁寄りの1～2個と中央の1個が組み合わさって支柱穴となることがあげられる。床面積は9～15㎡で、いずれの住居跡でも炉を検出することはできなかった。中期中葉の住居は完全な形を検出していないことから、確証はつかめないが、プラン等においては、前期末葉の住居跡の特徴を踏襲しているものとみられる。

また、選地との関連をみると、前期末葉においては調査区の西部、すなわち台地の中央部に住居を構えており、台地縁辺にあたるX軸30付近や、北東隅では土器の出土もほとんどなかった。中期中葉では、台地中央よりはむしろ、縁辺を活用する傾向が強いように見受けられる。

土壌は38基検出されたが、その半数は所属時期が明確でない。時期の明らかなものを記すと次のようになる。大木6式-SK33・55・80、大木7a式-SK40・74・84、大木8a式-SK1・2・12・13・14・37・38・83・97、大木8b式-SK41、弥生時代-SK73。

また、形態や覆土の相違から次のように分けられる。

I類 平面形が円形ないし楕円形のプランをもち、覆土に多くの遺物を含むもの。

SK33・71・72。

II類 平面形は円形ないし楕円形で、覆土の遺物は多くはない。

SK1・2他、I・III・IV・V類以外の土壌。

III類 平面形は隅丸方形になり平坦な底面をもつもの。

SK55・79。

IV類 底面が焼け、焼土・粘土のブロックが含まれるもの。

SK13・15。

V類 平面形が幅のせまい長方形で深く底面の幅は10cm前後。

SK97。

土壌の機能によって、以上のような相違が生ずるものと思われるが、現象としては把え

られるものの、その機能を断定することはむずかしい。V類は「Tビット」、「溝状ビット」と呼ばれるものであり、通常は斜面に集中して発見され、遺物はほとんど含まれないという特徴をもち、その機能については陥し穴説が有力である(註1)。本遺跡の類例は、遺跡の中央部の最も高い遺構密集地で単独に発見され、しかも、大木8a式の土器片が、底面から出土するなど各地の類例との隔りが大きい。今後さらに吟味していく必要がある。

## 2 土器について

今回の発掘調査で本遺跡から出土した土器は、縄文時代前期末葉から中期中葉までの時期が主体となっており、前期末葉から中期初頭における資料が出土したことは、山形県内は基より、東北地方南半における日本海側の型式細分を考えるうえで貴重な資料を提供したといえる。本遺跡から出土したこの時期の資料を比較するうえで、昭和26年から4年間4次に亘って調査が実施された遊佐町吹浦遺跡(註2)の資料を検討することが必要である。

本遺跡から出土した第1群土器a類からj類が、吹浦遺跡から出土した第1類土器から第3類土器に相当するものである。器形は、そのほとんどが深鉢形を呈し口縁部が外反するもので、形態は胴中部に最大径をもつキャリパー形と胴部に若干脹らみをもち直立する筒形状を示すものがあり、器形についてはその差異は余りみられない。施文法においても、半截竹管による波状・鋸歯沈線や平行沈線によるものと連続する爪形文、粘土紐貼付によるもの、あるいは摺糸の圧痕や絡条体の圧痕などを主体としており大きな相違はみられない。ただ、本遺跡で多くみられる施文法には、1a類・1c類の平行沈線や半截竹管で爪形状に連続する沈線と、1d類にみられる沈線による渦巻状文がある。また、(第15図1)でみられる絡条体の圧痕文を文様構成の主体とするものや、(第15図2)の渦巻状文を主体とするものなどは、数量的に多く出土しているが、粘土紐を貼付し上面に連続竹管文を施す土器群は少なく、体部文様帯に施される木目状摺糸文などの一群は出土していない。文様構成は、本遺跡の場合(第15図1・2)と1d類では渦巻状文様や指頭痕など口縁部文様に集約される傾向がみられ、吹浦遺跡第1類土器ではその文様構成は頸部付近から胴上半部に描き出されている。両者の文様構成上における多少の変化がうかがえる。

以上のように本遺跡と吹浦遺跡で出土した土器を概括して検討してみたが、本遺跡の場合も広義の上で縄文時代前期大木6式に比定されるが、その内容は異なった様相がみられ、型的な時間の差があるいは遺跡の内容差かは、今後の類例をまっけて検討課題とするものである。

縄文時代中期前半の大木7a式については、宮城県糠塚貝塚(註3)の第II群土器から第IV群土器にみられる文様構成は、本遺跡出土第2群土器にはなく、渦巻文様が口縁部に主体的に施され、2c類の結節沈線を伴う一群として理解されるものである。しかし、本

遺跡の場合資料としては少ないが、集合沈線や円形文のまわりに三角形陰刻が施される文様要素が共存しないことは特徴的である。山形県羽黒町郷の浜J遺跡（註4）や秋田県大畑貝塚（註5）でみられる集合沈線を主体に文様が描出されるものとは相違がみられる。

### 3 石器について

本遺跡で出土した石器（ツール）は474点にのぼり、後期旧石器時代に属するものとみられる4点を除けば、縄文時代前期末葉～中期中葉に製作・使用・廃棄されたものとみてよいだろう。その内訳は、石鏃25・尖頭器2・石錐22・石匙43・打製石斧およびその類品145・スクレーパー50・磨製石斧13・磨石72・凹石50・敲石11・線刻礫3・有溝砥石3・石皿2・石錘29である。

打製石器のなかでは、打製石斧およびその類品としたものの多さが目につく。ST10床面やSK72覆土、そして捨て場とみられるSX35で、大量にその関連品が出土した。その他にSK12・13の覆土から、IVa・Ia類の出土がある。これらの遺構、捨て場はいずれも大木8a式期という共通性をもつ。遺構外では、調査区の全域から出土しており、その量からしても本遺跡における時期差をのりこえた普遍的な石器という印象を受けるが、以上のような事実を踏まえれば、限定された時期に大量に製作されたものであることが窺い知れるのである。

礫石器では、磨石と凹石の間で反復使用のあることが判明した。また、ほとんどの礫石器に磨痕がみられ、本遺跡において、擦る作業の需要度が高かったことを暗示するものとして興味深い。また石錐は平均重量675gと、同時期の他の遺跡と比較すると3～5倍の重量をもつ。漁撈の対象となった河川の大小が、その重量に影響を与えるものと考えられる。

以上のことから、東興野B遺跡は最上川ペリを狩猟・漁労・採集の生活の場とした、縄文時代前期と中期及び弥生時代後期の集落跡であることが確認され、立川町における先史時代の様相の一部が明らかにされた。

- 註1 函館市教育委員会 「函館空港第4地点・中野遺跡」 1977年  
青森県教育委員会 「長七谷地貝塚」遺跡発掘調査報告書 1980年
- 註2 江坂輝弥他 「吹浦遺跡」 荘内古文化研究会 1955年
- 註3 加藤 孝 「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」 登米郡新田村史 1956年
- 註4 山形県教育委員会 「郷ノ浜J遺跡」発掘調査報告書 1981年
- 註5 男鹿市教育委員会 「大畑台遺跡発掘調査報告書」 1979年

---

埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

ひがし ころ や  
東 興 野 B 遺 跡

昭和56年3月25日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷

---